

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第199集

法 明 寺 古 墳

平成19・20年度（主）吉田大東線緊急交通改善事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第199集

法 明 寺 古 墳

平成19・20年度（主）吉田大東線緊急交通改善事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 9

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回、吉田大東線緊急交通改善事業に伴って発掘調査を実施した法明寺古墳は、菊川市和田に所在する。この法明寺古墳は、菊川流域では最大級の円墳であり、緊急を要する交通改善事業とはいえ、やむをえず消滅する部分のみ発掘調査を実施した。

その結果、古墳の築造過程を知る重要な所見が得られ、さらに古墳の裾部には中世から近世の墓が検出された。

これら調査によってえられた成果の詳細は本書に譲るが、古くから知られた古墳のため、本研究所の発掘調査は、地元和田地区をはじめ近隣の人々の深い関心を呼んだ。

この調査中には菊川市立河城小学校、和田地区自治会からの要請を受け、調査見学会や野外学習の機会を提供できた。どちらも地域の文化や歴史を遺跡とその発掘調査を通じて、感じていただくことができ、我々にとっても有意義であった。

担当した職員の言葉を借りれば、あらためて考古学の果たすべき役割を見直したという。文化遺産を未来に伝えるため記録に残すという、本研究所設立の本義はまさにここにある。今後も常に遺跡・遺物を語る言葉を持てるように、今回の調査が、その端緒となるように願ってやまない。

最後になるが、調査と報告書作成にあたっては、静岡県袋井土木事務所、文化課、地元和田地区自治会には多大なるご配慮を頂いた。ここに厚く御礼申し上げたい。調査は小規模で短期であり、集中した現場運営が求められた。梅雨と猛暑の中、現地作業に従事した方々の労をねぎらいたい。あわせて資料整理に従事した方々にも、その労をねぎらいたい。

2009年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 清水哲

例　　言

1. 本書は、静岡県菊川市に所在する法明寺古墳の発掘調査報告書である。
2. 本調査は（主）吉田大東線緊急交通改善工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡原理藏文化財調査研究所が実施した。
3. 現地調査は平成20年5月～8月に実施し、資料整理を平成20年9月～12月に行った。
4. 調査の体制は次のとおりである。

所長　瀧水　哲

次長兼総務課長　大場　正夫

次長兼調査課長　及川　司　事業担当　青井　拓司

調査研究員　足立　順司

5. 本書の執筆は瀧口彰啓が第5章第2節を分担し、それ以外は足立順司が担当した。
6. 出土人骨については京都大学自然人類学研究室片山一道教授に分析を依頼し、その所見をまとめた。
7. 遺物写真撮影は、当研究所職員が行った。
8. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
9. 発掘調査にかかる出土品及び記録資料については、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1. 本書で使用した方位はすべて世界測地系による公共座標系の方位である。
2. 遺構の標記は以下のとおりである。
SD = 潟 SK = 土坑 SX = 不明遺構（中・近世墓や性格不明遺構も含む）
3. 写真図版中の遺物の番号は本文・押印の番号と同一である。
4. 参考文献
出土遺物観察表については第5章の文末に記す。

目 次

序・例言・凡例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3章 調査の方法と経過	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査の経過	4
第4章 調査の成果	6
第1節 古墳の立地と土層	6
第2節 法明寺古墳	6
第3節 中・近世の遺構と遺物	11
第4節 銀文時代の遺物	21
第5章 まとめ	27
第1節 古墳はどのようにつくられたか	27
第2節 中世石塔について	27
第3節 近世墓について	29
第4節 出土銅口について	31

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	法明寺古墳墳丘図	5
第3図	遺構全体図	7
第4図	法明寺古墳土層図	8
第5図	墳丘土層図	10
第6図	中世遺構(SX05) 平・断面図	12
第7図	出土遺物実測図1	14
第8図	中世遺構平・断面図	15
第9図	近世遺構平・断面図	17
第10図	出土遺物実測図2	19
第11図	出土遺物実測図3	22
第12図	出土遺物実測図4・拓影図	23
第13図	出土遺物実測図5	24
第14図	出土遺物実測図6	25
第15図	出土遺物実測図7	26
第16図	墳丘築造工程復元模式図	28
第17図	錘型鋲口ほか	30
第18図	法明寺古墳(古墳面) 遺構全体図	33
第19図	法明寺古墳(中・近世面) 遺構全体図	34

挿表目次

表1	周辺遺跡一覧	3	表4	出土土器観察表	35	表7	出土土製品観察表	37
表2	近世墓法量一覧	16	表5	出土鉢形甕観察表	37	表8	出土石製品観察表	38
表3	錘型鋲口一覧	30	表6	出土金属製品観察表	37			

図版目次

図版1	1 法明寺古墳 周辺空中写真(南より)	
	2 法明寺古墳 空中写真(南より)	
図版2	1 調査前法明寺古墳(東より)	
	2 法明寺古墳 完掘状況(東より)	
図版3	1 法明寺古墳 墳丘調査(南より)	
	2 法明寺古墳 墳丘東西断面(南より)	

- 図版4 1 調査前法明寺古墳（東より）
2 調査区西側完掘状況（西より）
3 調査区東側完掘状況（東より）
- 図版5 1 法明寺古墳 墓丘東西断面（南より）
2 法明寺古墳 墓丘南北断面（西より）
- 図版6 1 SD01近景（東より）
2 SX04・05・06全景（東より）
3 山茶碗出土状況（北より）
- 図版7 1 石斧出土状況（西より）
2 山茶碗出土状況（東より）
3 水滴出土状況（南より）
- 図版8 1 SX04・05・06近景（北より）
2 SX06近景（北より）
- 図版9 1 SX03近景（東より）
2 石塔出土状況（東より）
3 SX09近景（西より）
- 図版10 1 SX01・02・10近景（南より）
2 SX01・02・10近景（南より）
- 図版11 1 SX02人骨・六道鏡出土状況（南より）
2 SX08近景（西より）
3 SX08人骨・カワラケ出土状況（南より）
- 図版12 1 SX09カワラケ出土状況（南より）
2 SX01・02・07完掘状況（南より）
3 SX02完掘状況（南より）
- 図版13 出土遺物 1 土器
図版14 出土遺物 2 土器・陶器
図版15 出土遺物 3 土器・陶器
図版16 出土遺物 4 金属・土製品・石製品
図版17 出土遺物 5 石製品
図版18 出土遺物 6 石製品

第1章 調査に至る経過

静岡県袋井土木事務所では菊川市和田地内に吉田大東線緊急交通改善事業の一環として道路拡幅を計画していた。そのため計画範囲について埋蔵文化財の照会があり、事前に静岡県教育委員会文化課では、現地において遺跡の有無について確認調査を実施した。その結果、計画された範囲の内、一部ではあるが法明寺古墳の範囲であること、中世・近世の遺物が発見されたことにより当該期の遺跡であると判断された。当初、この遺物の確認された地点では周辺に戦国時代の石塔が存在し、中・近世遺跡は墓地構造であると考えられた。

計画範囲のうち遺跡に該当する範囲は事前調査の対象とされ、平成20年3月24日に静岡県袋井土木事務所は、調査実施機関として静岡県埋蔵文化財調査研究所とのあいだに埋蔵文化財調査に関する委託契約を結んだ。なお調査に関する調整と指導は静岡県教育委員会文化課である。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

法明寺古墳の位置する菊川市和田は菊川市域東部にあたり、昭和の大合併によって菊川町ができるまで河城村と呼ばれた地域である。

この周辺の地形は東西に流れる菊川の開析した谷底平野と段丘、山地に分かれれる。菊川は栗ヶ嶽(無間山とも呼ぶ)山麓から発するが、流域の狭長な谷底平野には集落と水田などの耕作地が点在し、段丘と丘陵には茶園や畑地と小規模な集落が点在するが、集落は概して谷底平野に集中する。法明寺古墳に近接する東海道本線は、牧の原トンネルまで谷底平野にそって走っている。車窓からの眺めはお茶の菊川にふさわしい茶園と段丘にある棚田が広がっている。

第2節 歴史的環境

ここでは周辺に分布する遺跡にふれながら、法明寺古墳の歴史的環境を概観してみたい。

菊川上・中流域では石烟遺跡から出土した縄文時代後・晚期の土器が、縄文時代というこの地域ではもっとも古い段階の歴史を刻む資料である。遺跡名称である石烟にふさわしく、多量の磨石・石皿・打製石斧など石器が採集されていることは古くから知られるところである。遺跡は低位段丘に位置し、水田との比高差は1~2mである。以前に菊川町教育委員会(現在の菊川市教育委員会)によって発掘調査がなされ、縄文時代の住居跡、土坑、溝、平安時代の堅穴住居跡が発見されている。出土した土器からは縄文時代後期から晩期後葉までほぼ継続して営まれたこの地域の拠点的遺跡と考えられよう(篠原修二 加藤賢治 1983)。

法明寺古墳の東北方向の丘陵上にある赤谷遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である。1954年、運動場整備中に土器片とともに竪穴住居跡の輪郭が発見され、その年の夏に和島誠一の指導で発掘調査された。その後、1881年に農協中央研修センター建設に伴って、菊川町教育委員会によって第二次調査がおこなわれた。和島と菊川町の調査によって竪穴住居跡43軒、掘立柱建物跡などが発見されている(篠原修二 2007)。覆土中より縄文時代中期後半の土器も発見されている(田辺 1990)。赤谷遺

跡は平野との比高差35mという段丘上に立地し、東西200m、南北150mの広さに営まれた大型集落と考えられる。

樋宜屋敷遺跡では縄文時代早期と考えられる集石炉と弥生時代後期の竪穴住居跡11軒などが発見されている。赤谷遺跡と同様段丘面に営まれた遺跡で、樋宜屋敷遺跡の中心時期は弥生時代後期であって、赤谷遺跡の集落と併存していた可能性が高い。この遺跡についても、古墳時代前期にはいると、赤谷遺跡同様に発見された住居跡の数は著しく減少していることから、段丘や丘陵上に営まれた集落が衰退期に入っていたことが判明した（塙本和弘 2007）。

つぎに述べる原段遺跡は、法明寺古墳に近接する低位段丘に営まれた集落遺跡である。茶園開植に伴い3ヶ年にわたって調査された結果、古墳時代後期に属する5軒の竪穴住居跡が発見されている（塙本和弘 2006）。この地域の古墳時代前・中期の集落の様相がよくわかっていないものの、原段遺跡の立地は、谷底平野を見下ろす高位段丘や丘陵上から現在と同じような低位位置に移動していることを示している。すると縄文時代をのぞき、赤谷遺跡のような高い位置に集落が営まれることは、今までの歴史の中できわめて特徴的といえよう。

菊川平野の古墳の分布をみると、菊川下流域には中国製（國産という説もある）三角縁神獣鏡が出土した上平川大塚古墳（前方後円墳）がある。この古墳出土の鏡は京都府椎井大塚山古墳出土の同型鏡であり、そのほかの副葬品の組み合わせによって、その築造は4世紀後半と考えられている。今のところ菊川平野最古の古墳と考えられる。

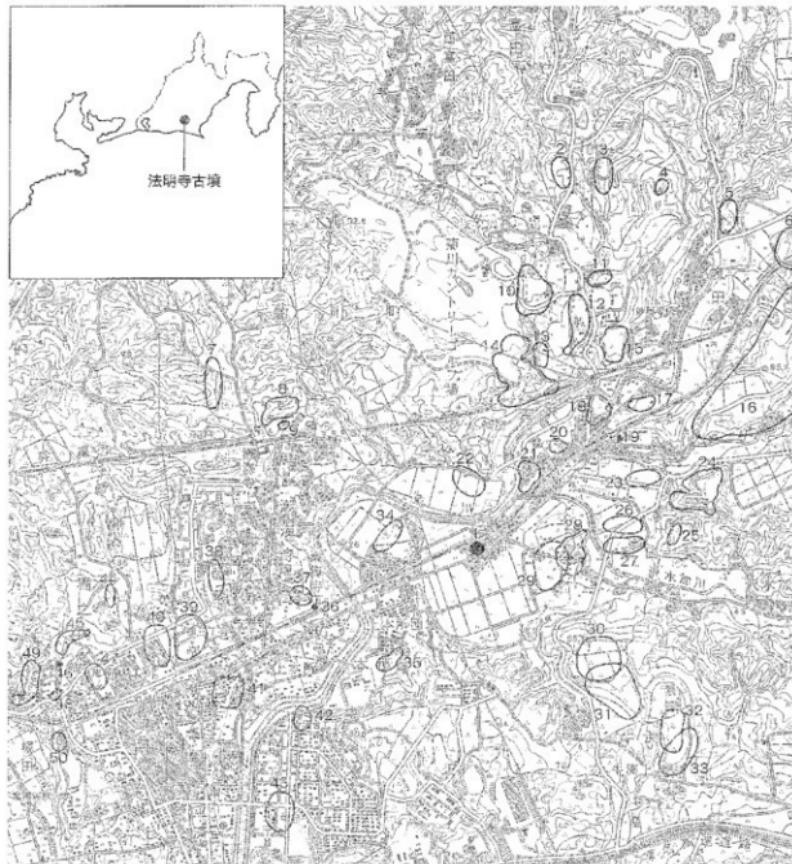
菊川市神尾にある庚申塚古墳（前方後円墳）は形態や立地からすれば、上平川大塚古墳につづく年代と考えられる。舟久保古墳（前方後円墳）は5世紀前半から中葉の年代が考えられる。同じ段丘面に存在する寺の谷古墳群のうち3号墳は、この地域ではきわめて少ない形象埴輪が出土した方墳で、6世紀の初めに築造されている。のことから小規模ながら首長墓の系譜を引く古墳といえよう。

では法明寺古墳と同じ菊川中・上流域の古墳はどのような様相であろうか。全長45mを測る大徳寺古墳（前方後円墳）は段丘上に位置する。未発掘のため詳細は不明であるが、5世紀後半の築造と考えられる。同じ墳に築造されたと考えられる法明寺古墳は円墳であり、菊川流域の5世紀代の首長墓がすべて前方後円墳であることからすれば、この地域の古墳時代を考える上で、看過できない。

また大徳寺古墳周辺には6世紀前葉の埴輪が出土している鹿島古墳や星川古窯跡で焼成された高田ヶ原公園内古墳が存在し、小規模ながら埴輪をもつ古墳の存在は注目できる。

遠江の首長墓の中で、菊川平野の前・中期の首長墓をみると、それほど大規模な古墳はない。

また一定の地域に集中することはなく、またその地域に次々と首長墓が築造されたとは考えられない。このことは古墳時代前・中期においては、菊川平野の中である一定の地域に卓越した首長が存在せず、上流域と下流域の中でそれぞれ移動していたと考えられる。



第1図 周辺遺跡分布図（国土地理院発行 1：25,000地形図「掛川」を複写して加筆）

表1 周辺遺跡一覧

1 法明寺古墳	11 御靈神社遺跡	21 吉沢塚遺跡	31 里山窓群	41 前田坪遺跡
2 井上段遺跡	12 菩提寺遺跡	22 當ノ前遺跡	32 長者原遺跡	42 山田遺跡
3 向林遺跡	13 殿前遺跡	23 海戸田遺跡	33 長者原遺跡	43 中島遺跡
4 山賦屋敷	14 長行山城	24 赤谷遺跡	34 矢田部遺跡	44 西ノ谷横穴群
5 六反田道跡	15 西原遺跡	25 幽宣屋敷遺跡	35 八王子遺跡	45 篠ヶ谷横穴群
6 秋常段遺跡	16 千駄ヶ原遺跡	26 後久遺跡	36 下ノ段古墳	46 天白浦古墳
7 奥ノ池遺跡	17 西峯I遺跡	27 石堀遺跡	37 下ノ段遺跡	47 八斗田遺跡
8 薬海寺遺跡	18 西峯II遺跡	28 原段I遺跡	38 長泉寺遺跡	48 西宮浦横穴群
9 溪御堂瓦窯	19 上ノ段古墳	29 原段II遺跡	39 東流砂遺跡	49 大淵ヶ谷横穴群
10 富田遺跡	20 西福音寺遺跡	30 上の原遺跡	40 八斗田遺跡	50 高田ヶ原古墳群

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

光明寺古墳の発掘調査は、道路拡張工事により掘削される範囲を工事計画図面と現地の立ち会いに基づいて確定し、あわせて確認調査によって遺跡の範囲とされた部分を対象とし、実施した。

調査にあたっては、事前に1/50の縮尺による墳丘図を調査対象範囲を覆う5000m²の範囲で作成した。この墳丘図は公共座標（世界地図系 平面直角座標系）の(X, Y) = (-136, 520.000, -36, 260.000)上としている。調査対象範囲には10×10mのグリッドを設置して位置をしめしたが、これは先にふれた墳丘図の座標系に基づいている。グリッドの呼称はX軸方向（南→北）をアルファベット、Y軸方向（東→西）をアラビア数字で表記している。

地形図、実測図の作成及び造構や土層断面の記録、遺物の取り上げにあたっては、空中写真測量と手実測による作図を行った。また、4×5版大型カメラとプロニー版中型カメラ、35mm小型カメラを用いて、モノクロネガ、カラーリバーサル、カラーネガによる写真撮影を行った。

第2節 調査の経過

4月2日～30日

新年度に入り2日より届出書類の準備を開始した。土木事務所、指導機関の文化課等との現地協議、外注する現地作業の樹木伐採・墓地基礎撤去・墳丘図作成等の現地打ち合わせと立ち会いを行う。

5月1日～23日

墓地基礎撤去・空中写真測量作成等の現地打ち合わせと立ち会いを行う。現道側の上面には大形土糞による石材流失と土留めを施工し、重機による墓地基礎撤去を調査区の下段部分より開始。撤去後、実施。仮設土留めと調査区墳丘側に転落防止用ネットを設置。

13日から現地専務所の設置、発掘用資器材の及び蓋機による表土除去を終了し、土木事務所・文化課の土量確認検査を受けた。

5月26日～6月30日

人力による表土除去を行う。表土中より牛・近世の陶磁器とともに石塔片が出土。古墳西側の茶園部分は昭和の開拓によって、旧表土の一部まで大きく搅乱を受けていた。その際、墳丘を大きく崩し、茶園を広げていることも判明した。したがって当初、想定された古墳の規模より小規模となる。

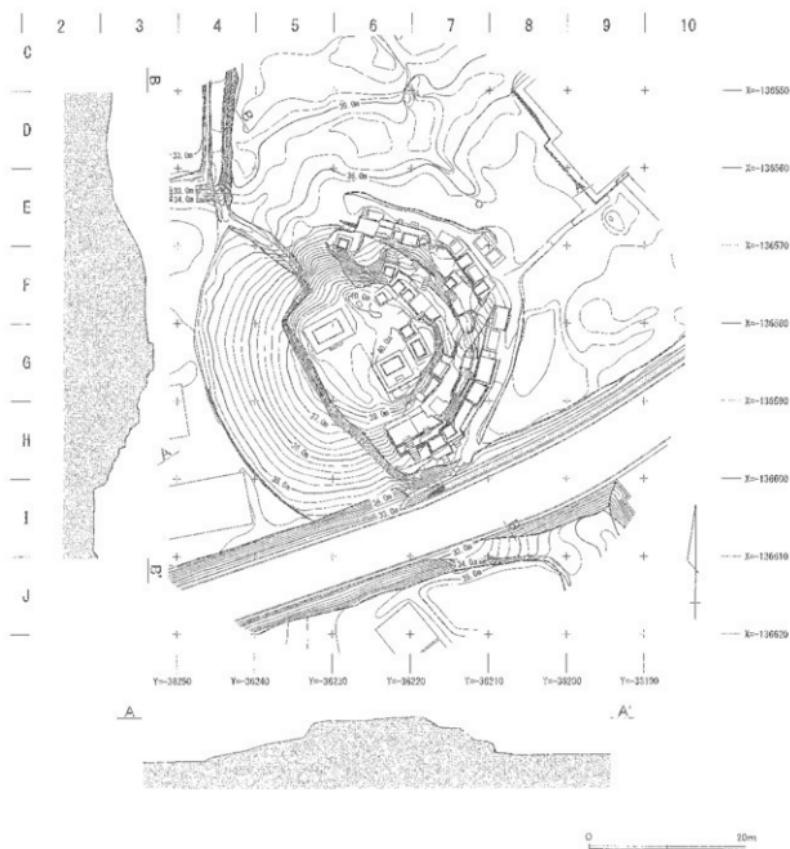
7月1日～8月12日

墳丘部を中心とした中・近世の墓地・供養塔出土遺構の検出と調査を行う。中世の石塔は元の位置を留めておらず、近代以降の墓地造成によって、寄せ集められているものが多いことが、判明した。この石塔の下位から近世の墓塊が発見され、調査を進めた。空中写真測量による調査区全体図作成、個別遺構については手実測を併用した。古墳の墳丘断ち削りを行い、古墳廻成にあたっては古墳の範囲に旧表土を残して、その周りを土取し、古墳の範囲を区画していること、さらに盛土は黒土と黄褐色土を交互に積み上げ、たたきしめていることなどの資料を得た。

8月13日～29日

土木事務所・文化課の土量確認と撤収状況の確認検査を受けた。

ベルトコンベアの撤去や電気・ガス・水道撤去工事等を行う。出土遺物や発掘の資材類を搬出する。



第2図 法明寺古墳墳丘図

リース物件を返却し、現地事務所を収束して現地調査を終了した。

9月1日～12月27日

まず遺物の発見届、発掘調査結果概要等の提出書類の作成し、提出する。そのち持ち帰った出土遺物・図面・写真等を整理する作業にはいる。

出土した土器は全体がわかるよう広げ、接合できる破片は接合し、合成樹脂で補強した。

写真は印刷原稿にするため選択し、図面類の整理と版下作り、原稿執筆など調査報告書の刊行作業を行い、印刷所に発注した。

これにより現地調査と調査報告書作成の作業は完了した。

第4章 調査の成果

第1節 古墳の立地と土層

すでに「第2章 遺跡の位置と環境」では、菟川流域の遺跡と古墳の立地について考えたが、さらに、法明寺古墳について細かくみるととぎのようである。古墳は菟川の形成した谷底平野に向かって、東西に延びた低位段丘上に位置する。平坦な段丘のもともとの地形はほとんど凹凸はなく、古墳はこのほぼ平坦な地形の上に、すべて盛土によって築造されたと推定される。

墳丘盛土の下部には旧表土の黒色土と基盤層の黄色土（シルト）からなる古墳築成以前の土層が残っていた。旧表土層の黒色土は墳丘以外にはほとんど残されていなかったが、基盤の黄色土は調査区東側で海拔34.7m、墳丘下で35.1m、調査区西側で34mを測った。段丘は全般的に東から西へ緩やかに下る傾向ではあるが、古墳はこの段丘面においても、わずかに高まった部分に選地したと考えられる。

古墳の東側ではのちに述べるSX12と呼称した不定形の掘削跡が認められた。

この掘削跡は、黒色土と黄色土を古墳の範囲のみ円形に掘り残し、裾部を削りだしている。このことによって古墳の内外と規模・形態を決定していたことが判明した。

調査区東側のSX12中には暗褐色土が堆積していた。それより上位には部分的に擾乱を免れた中・近世集落遺構が残っていたが、樹木や茶木の抜き取り穴や近代以降の墓地造成のために擾乱されていた。その土層はしまりのない黒褐色土である。

調査区西側では茶園となっていたが、基盤層の黄色土までも竪根の爪痕が残っており、かろうじて一部に旧表土の黒色土の堆積が残っていた。それ以外は、茶園の造成のため古墳の墳丘を崩して西側に押し出していることが、北側土層断面より判明した。道路側の南壁は大きく擾乱され、それを埋めていたこともあって、古墳の墳丘と裾部は判明しなかった。

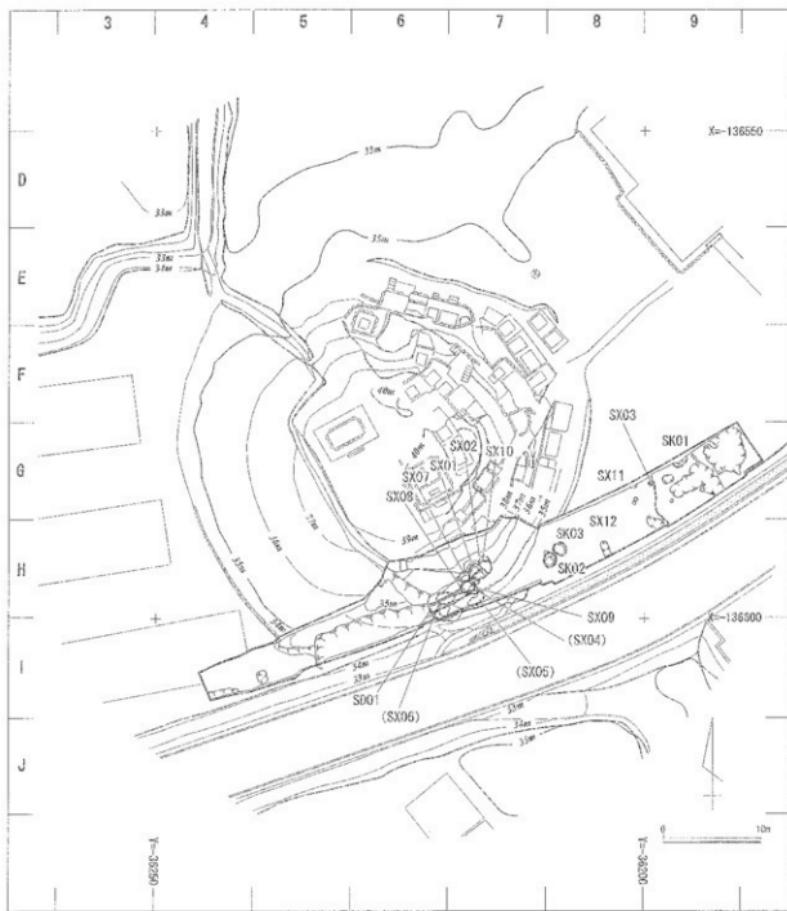
第2節 法明寺古墳

(1) 測量調査の成果

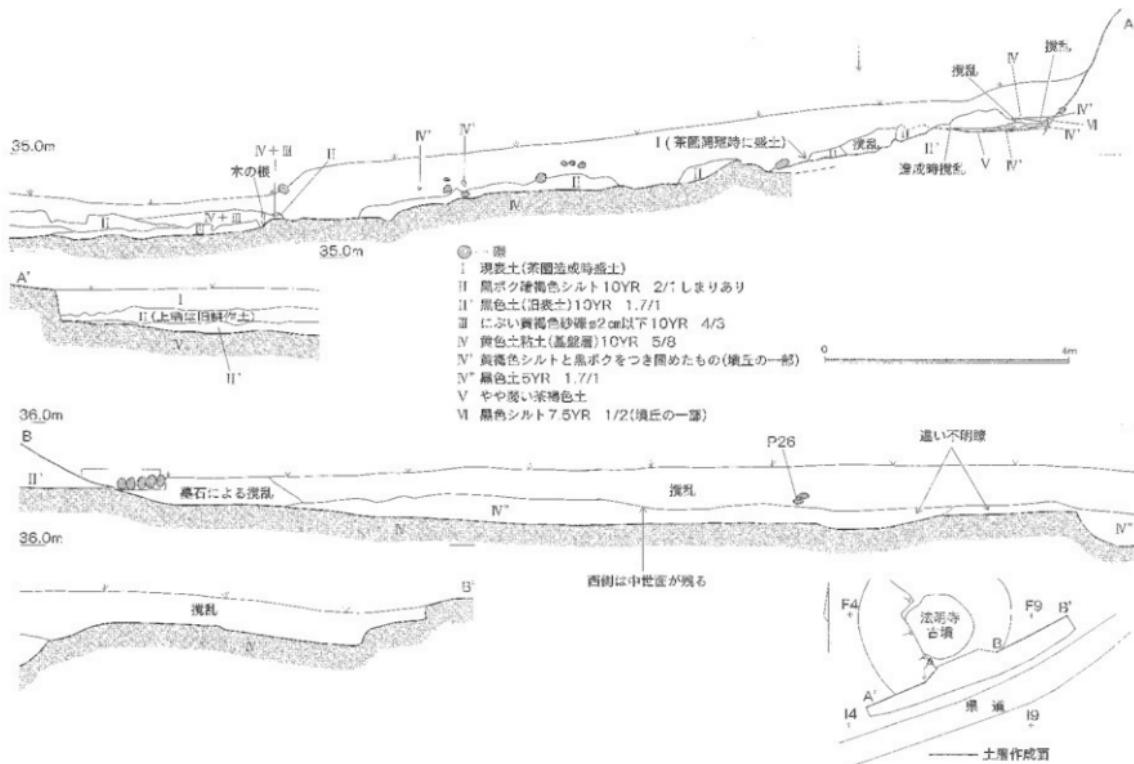
今回、法明寺古墳の墳丘南側が削平されるため、それ以前の現状を記録するために測量調査を実施した。測量調査は、古墳を中心に想定された周溝までも含む、5000m²を対象とした。

測量調査の対象範囲は、墓地と数十年来放置された竹林となっていた。とくに竹林内の作業はきわめて困難であったが、発掘調査の期間中、法明寺役員・信徒の依頼によって、すべて伐採処理された。

このため見遁しの悪かった箇所についても、竹林伐採後、柵柵することができ、現状での法明寺古墳



第3圖 運轉冷體圖



第4図 法明寺古墳土眉図

を把握できたと考えられる。

測量図から読み取れる法明寺古墳の姿は、つぎのようである。

- 1 墳丘北東から南東は、墳頂部から裾部まで雑壇のように、近・現代の墓地として利用されている。そのため墓標の石塔が建立され、改変を受けている。
- 2 墳丘北西から南西は、海拔38m～35mの等高線の範囲まで大型重機による茶の開植のため削平され、さらに削平した墳丘盛土を円形に盛って茶園を造成している。
- 3 一部、古墳の傾斜角度の残存する場所をみると、傾斜は急峻であったと推定される。
- 4 墳頂部の海拔高は40.2m、墳端の海拔高は発掘調査によって34.7mを測っている。したがって古墳の高さは見かけ上5.5mとしておく。
- 5 古墳の直径は見かけより小さい事が想定され、墳端を発掘調査によって判断するしかない。
- 6 古墳を取り巻く周溝の存在も想定されるが、等高線の乱れているため、その有無は発掘調査の結果を待つしかない。
- 7 墳丘は茶園造成によって西側が改変を受けている。

(2) 墳丘と周辺部の調査

調査区では墳丘の両端部と墳丘断面調査を実施した。すでに第1節で述べたように調査区東側では旧表土と基盤の黄色土を掘削して墳端を円形に削り出している。古墳の内外をこの段階で決定したこととなる。墳丘内に残っていた旧表土表面の海拔高35.7m、基盤の黄色土上端の海拔高は35m前後を測る。

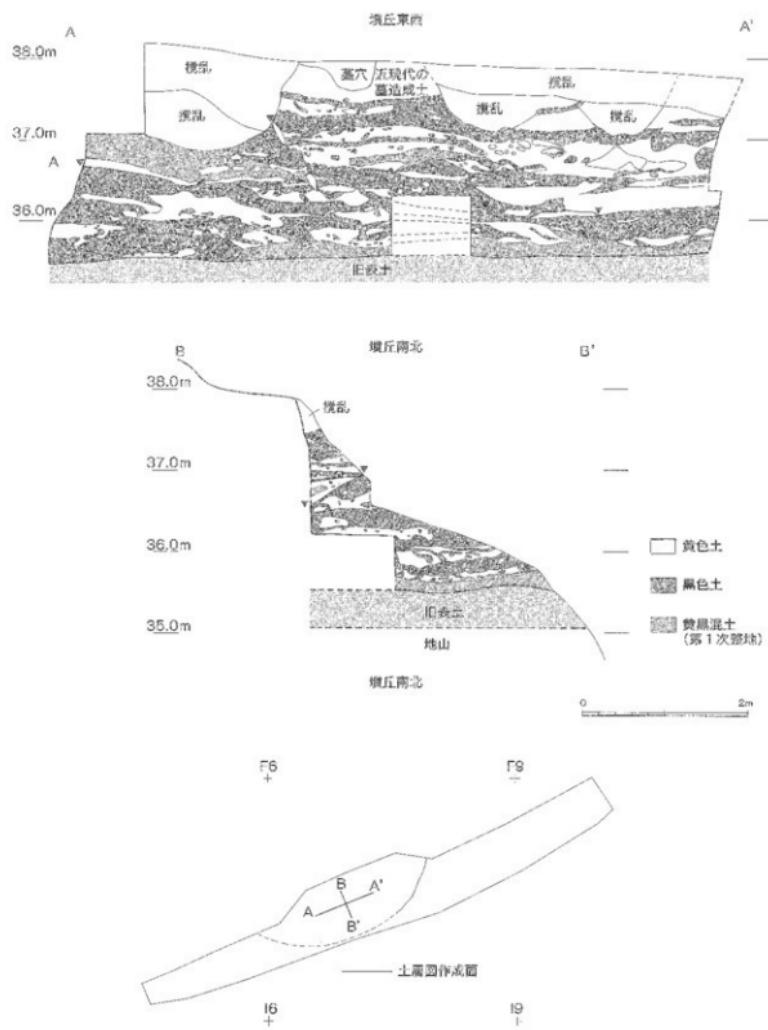
SX12

古墳裾部より東側の平坦面から発見され、長さ18m～12mを測る不定形の掘削跡が認められた。底面も凹凸がある。平均で0.3mである。この遺構は周溝と理解するよりも、墳丘の盛土を確保するために掘削した跡と考えられる。本調査中に、菊川市教育委員会の確認調査が調査区の北側に実施されたが、同様の所見が認められた。法明寺古墳のもっとも身近な場所から墳丘の土を採取したこととなる。なおこの遺構内の墨り奉籠大の櫛が底面より浮いて散在していた。あるいは法明寺古墳の落石した葺石かもしれない。

(3) 墳丘の構造

今回、墳丘の断面調査を実施し、法明寺古墳がどのように築成されたかを調査した。調査範囲の墳丘上部は、後世の墓地造成によってもとの姿をとどめていなかったが、旧表土から高さ2mほどが墳丘の盛土部分をよくとどめていた。以下、飛土の土層観察の結果に基づき、この古墳がどのように築成されたかを箇条書きにする。

- ① 旧表土の直上には小さい黄色土ブロックを含む黒色土を厚さ0.2mほど積んでいた。この黒色土は旧表土を掘削した土層で、黄色土のブロックは基盤層の黄色土である。SX01の掘削跡をみると、シルト質の黄色土もしくは一部その下の砂礫混じり黄色土まで掘り抜いている。掘削順は旧表土の黒色土ついで基盤の黄色土、砂礫混じり黄色土となる。古墳の盛土をみると、一部に盛土のベースとなる土色に混じることがあるものの、基本的に黒色土と黄色土は、それぞれ別々の土を選び、互い違いに積んで版築している。そのためには掘削した土を黒色土と黄色土を混じることなく、別々に分けておかなければならぬ。
- ② つぎに版築によって古墳の外周部に高さ1～0.8mの円形の土手を盛りあげ、さらに土手内を黒色土と黄色土を交互に積んで埋め、水平になるまで盛土を積み上げた状況を認めた。このように土手状に盛りあげることによって、間違いなくその範囲とその高さにのみ盛土される。この築成方法をとることによって、計画された墳丘の規格を保つことができることとなる。これを第1段目とする。
- ③ 第2段目は第1段目の水平面よりや内側に円形の土手を盛りあげ、さらに土手内を黒色土と黄



第5図 塙丘土層図

色土を交互に積んで埋め、水平になるまで盛土を積み上げた状況を認めた。これは第1段目と同様である。ただし盛土1単位は、第1段目と比べ厚い。残念ながらそれより上位は墓地造成によって大きく擾乱を受け、墳丘盛土の所見は得られなかった。

以上、この所見の資料的制約を以下、述べておく。調査区の土層の範囲は、法明寺古墳の南端東西7mの土層断面の所見に基づく。さらに調査区墳丘部分の東西は大きく擾乱を受けているため、墳丘築成の土手の幅が把握できなかったことである。

第3節 中・近世の遺構と遺物

(1) 中世の遺構

SD01

近世墓SX08とSX09と重複して発見された。残存長4.5m、幅0.5m、深さ0.35mを測り、底面は逆台形を呈する。近世墓との新旧関係は、遺構の検出作業の所見と堆積土層の検討で、近世墓の掘削によって、東側の壁面が削り取られていることが認められた。このことから近世墓が新しくSD01が古いと判断された。覆土中位より山茶碗片が出土し、それより後世の陶磁器片が認められなかつたため、山茶碗の時期の遺構と考え、その年代を13世紀前～中葉の時期に比定したい。それにしても法明寺古墳の裾部を直線的に溝を掘るという行為はどのような意味があったのかは理解しがたい。この溝の南隣にのちにふれるSX05という中世墓があり、積極的な根拠はないが、古墳と中世墓の間を切断し区画をしたと推定しておく。

SX05

古墳裾部にあたる調査区の南端より発見された。遺構は東西の長さ3.6m、南北の幅1.2～0.8mを測り、参2個大の礫を一重に敷き詰めた遺構である。形状からすると集石墓と考えられる。子細にみると、一辺が削えられた礫の集積ブロックがそれぞれあり、SX05は、このブロック5カ所の集石墓からなる集合遺構と考えられる。

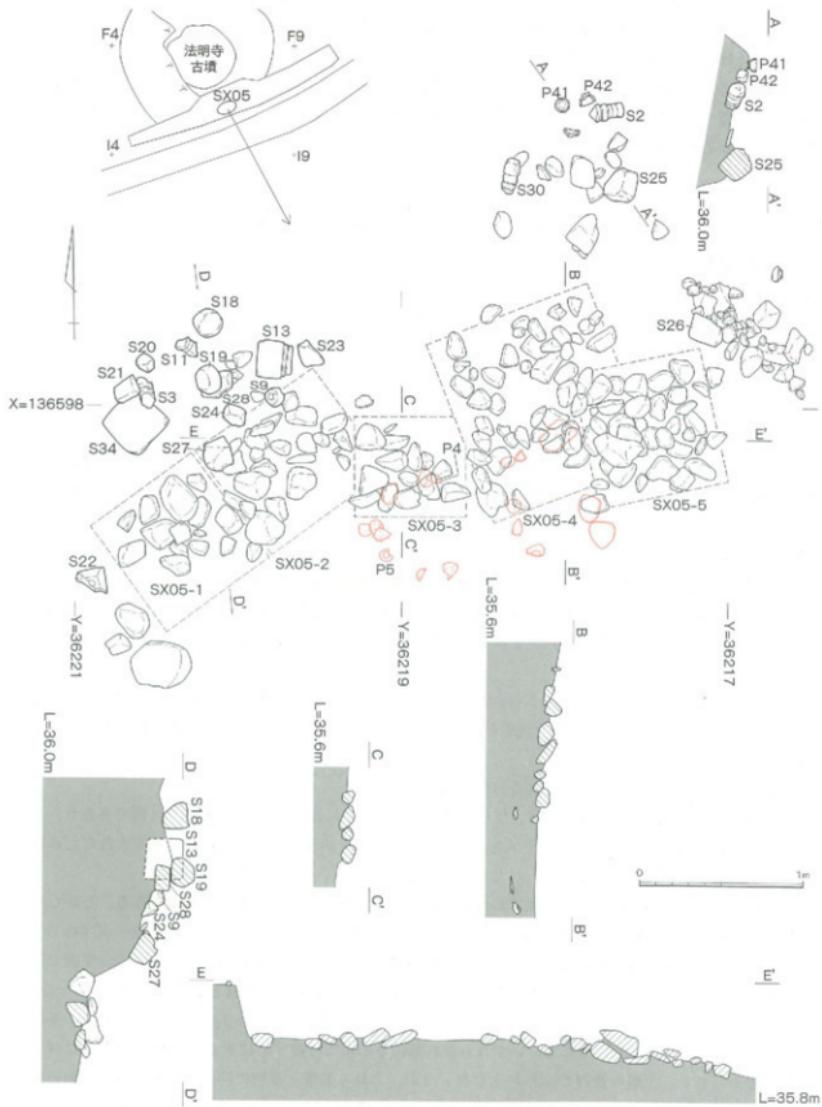
この集石墓を西側からSX05-1からSX05-5号墓（それぞれ1から5と略記）と呼称する。5は一辺0.8～0.7mの方形区画であり、残存状態が良く、4号墓の上に一辺の礫が並べられている。したがって4号墓より新しく築成されたと判断できる。

4号墓は南北1.2m、東西0.7mを測る方形の区画である。

3号墓は残存状態が良好ではないが、残りの良い南辺からすれば0.7mを測る方形の区画であろう。3号墓の礫が抜かれた位置に4号墓の礫が並べられている。したがって4号墓が新しく築成されたために礫の一部が破壊されたと判断される。したがって3号墓が古く、4号墓が新しい。

1号墓と2号墓は集石を構成する礫群が乱れているため、その形状の詳細が不明確である。しかしながら礫の配置をみると直線的な箇所もあって、方形の区画を呈するものであろう。すると一辺が0.8～0.7mほどの集石墓と推定される。1号墓と2号墓の新旧関係は不明である。このほかSX05の東側で礫群と山茶碗がブロックで出土した。集石墓であるかは明瞭ではないので、遺構として取り扱わなかった。

出土品については、集石の範囲からは認められなかつたが、集石のレベルより0.15m下位から山茶碗と小皿が一定のレベルから出土した。いずれも集石墓にきわめて近接する位置からであり、SX05に伴う遺物と考えられる。土層の検討ではわからなかつたが、これら遺構と遺物に関して、集石墓が遺物の出土面より高い状態にあったと推定される。このことから、集石墓は遺物の出土レベルである中世の旧表土面より0.15mほど上位に造られていたと判断される。



第6図 中世遺構（SX05）平・断面図

(2) 中世の遺物

SX05からは、遺構の時期を示す山茶碗と小皿（第7図1～5）が出土している。図示できた山茶碗と小皿は、出土状態によりいずれも同一時期と考えられる。これらは東遠系山茶碗に分類され、至近距離にある畠山古窯跡群で焼造されたと考えられる。畠山古窯跡群と同じ東遠窯である島田市横岡の山茶碗窯の製品を分析をした河合修によると、Ⅲ-1期に属する（河合修2001）。碗の高台端部にはモミ痕は認められない。小皿の高台には糸切り痕はそのまま残している。

遺構外から出土している山茶碗と小皿を第7図6～24に掲げた。22のように新しい小皿も認められる。出土位置は茶園造成で搅乱を受けたH-6区からも出土している。これらは大破片であって元位置を留めていないが、出土位置が離れていることから墓地造成によってSX05から流れ込んだ遺物と考えられない。するとSX05の西側にあたる古墳の裾部に山茶碗を伴う遺構が存在し、それが破壊を受け遺物のみ残っていたと考えられる。

SK01から東遠窯の山茶碗（第7図25）が出土した。焼成不良である。時期は河合分類のⅢ-2期に属する。SK01の覆土は近代以降の擾乱土と同じであり、この山茶碗も近代以降に埋められたと考えられる。碗の見込みと底部は焼けているが、見込みの煤付着は繰り返し行われている。中世にこのような行為が行われたとするよりも、完形であったため近接する毘沙門堂の祭事に再利用され、そのち埋められたと理解したい。

SX02から東遠窯産大平鉢（第7図29）が出土している。体部は半球形を呈し、口縁端部を丸く收めていることから、河合分類に当てはめるとⅢ-1期に属すると考えたい。SX02の時期は近世後期以降であって、この鉢は遺構の年代と関係しない資料である。おそらく上部から流れ込んだと考えられる。

(3) 中世後期から近世初期の遺構

SX03

G9グリットから発見された石組遺構で、その形状から集石墓であろうと推定される。東と南側にはほぼ長さ0.25m、幅0.2m大を測る礫による囲いが残り、その中に長径0.1m大の礫を入れている。この遺構に伴って遺物が認められていないため、その時期は不明であるが、近接する周辺から古瀬戸後期の陶器が出土しているので、15世紀中葉から後半の遺構と考えておきたい。

埋め甕

I7グリット杭付近の搅乱の中から、接合すると1個体となった常滑窯の甕片が出土した。また同一個体の破片は茶園造成の際に大きく研削され、埋め戻されていた廐棄穴からも出土している。細かく破碎された時期については、中世埋納時、昭和の墓地造成や茶園開拓時と3案が考えられるが、手がかりはない。これを草に遺物の出土としてみるかは意見の分かれるところであるが、磐田市二子塚中世墓の例のように（磐田市教育委員会2003）、土坑内に常滑窯が破片で埋納されていた例もあり、ここでは埋め甕遺構として扱った。

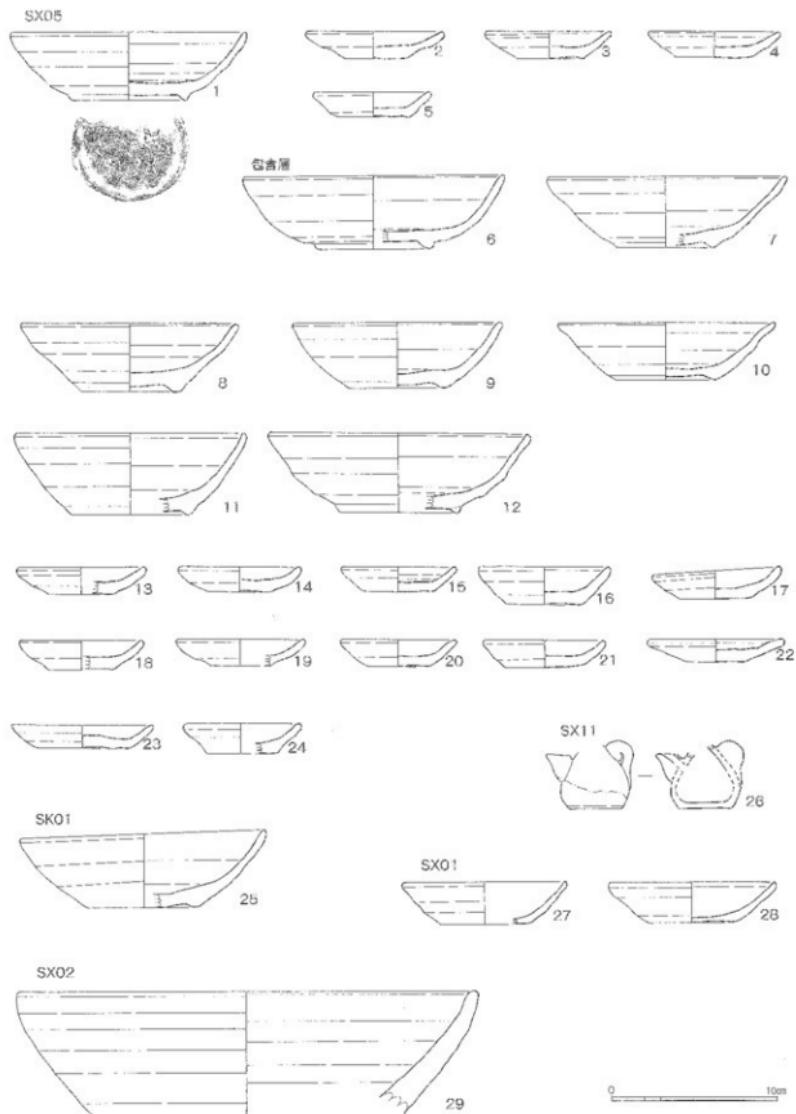
SX11

長径10cm大の礫2個を重ねている。その隙間から水滴が出土したが、その位置からは偶然入り込んだとは思われず、何らかの意図で隠すように納めたと考えられる。この遺構は搅乱を受けず、当時の状況を保っていたことと推定される。それと同時にこの遺跡の中世における地表面を考える上で、示準となる遺構である。

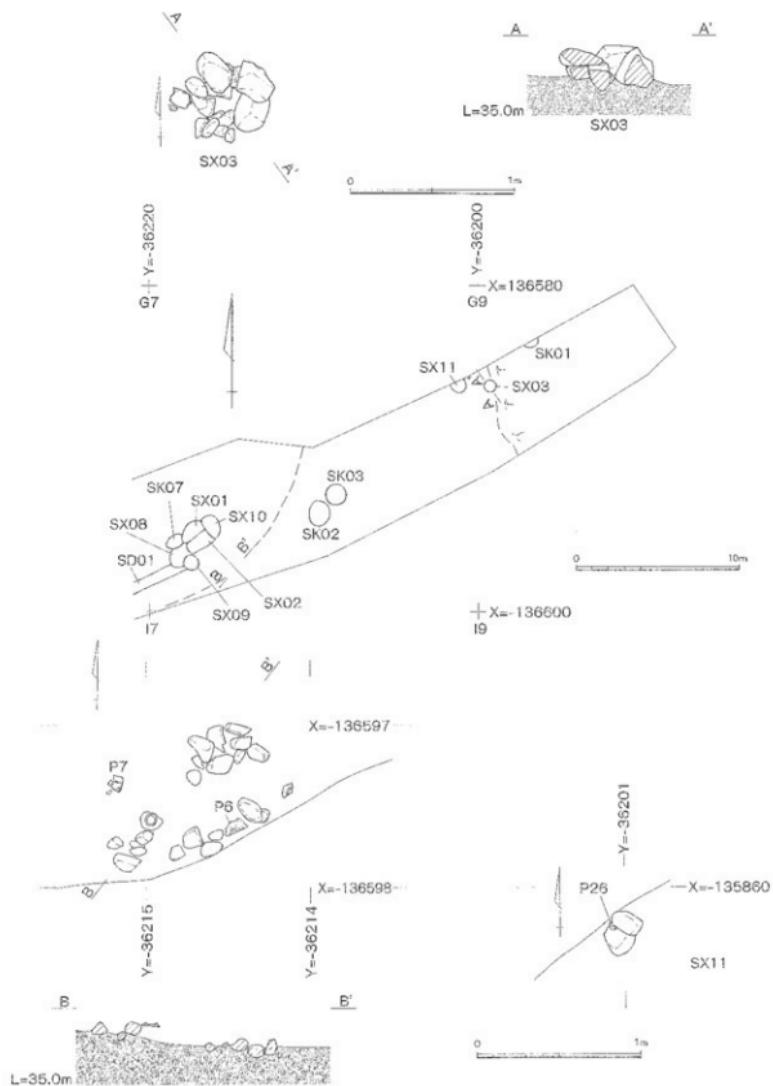
(4) 中世後期から近世初期の遺物

今回の法明寺古墳の調査では、調査区東側において、第7図26、11図46～48・50・51に掲げた古瀬戸後期から大窯期の陶器が出土した。49は明の青磁皿で、高台内に酸化鉄を塗る。時期は15世紀代である。

46が古瀬戸後期II～III期の仏花瓶、47が同じ時期の瓶頸、48が古瀬戸後期IV期の縁袖皿である（藤沢



第7図 出土遺物実測図1



第8図 中世造橋平・断面図

良祐 2008)。48の底部には「妙」カと推定される墨書きがある。50は古瀬戸前期後半の小壺もしくは合子である。51は大窯田期の天目茶碗である。26は体部下間に酸化鉄を化粧掛けを施した水滴である。大窯期の瀬戸・美濃製品である。52は登窯期である17世紀前半の天目茶碗である。H7グリットの搅乱土から出土した。

43は無釉の常滑産大甕である。その時期については常滑編年の10または11型式であろう(赤羽一郎・中野精久 1994)。輪積み成形で造り、内面には積み上げた箇所を叩き締めて調整している。外面は、器面を板状器具で縱斜め方向に削り取るようになでている。口縁部破片の上位の一部を打ち欠いているが、採集された破片のすべてにみられる。搅乱時に偶然このように破損したと考えるよりも丁寧である。埋納の際、このような行為を施すことがあるのであろうか。類例を得たい。

さらに口縁部と口縁部から体部につづく箇所には、漆縫ぎによって補修した箇所をがみられる。

(5) 近世の遺構

法明寺古墳の墓部と墳丘最下段から6基の近世墓(SX01・02・07・08・09・10)が発見された。その特徴は以下の通りで、規模については下表に掲げた。

表2 近世墓法量一覧

()は残存値 単位=m

遺構	長さ・幅・深さ	遺構	長さ・幅・深さ
SX01	(1.7) × (0.9) × (0.84)	SX08	1.3 × 1.06 × 0.47
SX02	(1.35) × 0.94 × 0.6	SX09	1.0 × 0.9 × 0.4
SX07	(1.0) × (1.04) × 0.8	SX10	(1.5) × (1.0) × (0.5)

- 墓の形態は、橢円形または円形の土坑である。
- 火葬ではなく、藁や布で覆った可能性があるが、直葬と推定される。
- 釘や金具を伴っていないことから早棺や木棺を使用した痕跡はない。
- 土坑の大きさや形態、さらに入骨が一部しか遺存していないことから、改葬されていたと推定される。
- 副葬品にはカワラケと六道鏡がある。

6基の近世墓とその周辺は、複数回にわたって大規模な墓地整備が行われ、発見された土坑墓の上部に厚く盛土され、新たな埋葬地が造成されていた。この造成地の中にのちに取り上げる一石五輪塔や宝鏡印塔など戦国期の石塔と江戸後期の茶碗が出土した。当初、石塔類は流れ込みであるものの周辺に存在したと考え、この石塔類の墓中箇所の東側をSX04とし、西側をSX06とした。

ところが調査が進むにつれ盛土を取りはずすと、近世後期の土坑墓が検出された。このことによりSX04とSX06の石塔は、土坑墓廐室以後に集められたこととなり、さらに造成土中からコンクリート片が出土したことから、おそらくこの造成の最終段階は戦後であろうと推定された。

6基の近世墓では墓標である墓石ではなく、有機質で残りにくい木製塔婆の有無は不明である。SX09とSX02の土坑上部には礫を並べているが、墓標の基礎もしくは墓標そのものと推定される。したがって礫の水平面が近世の墓地表面と考えられる。

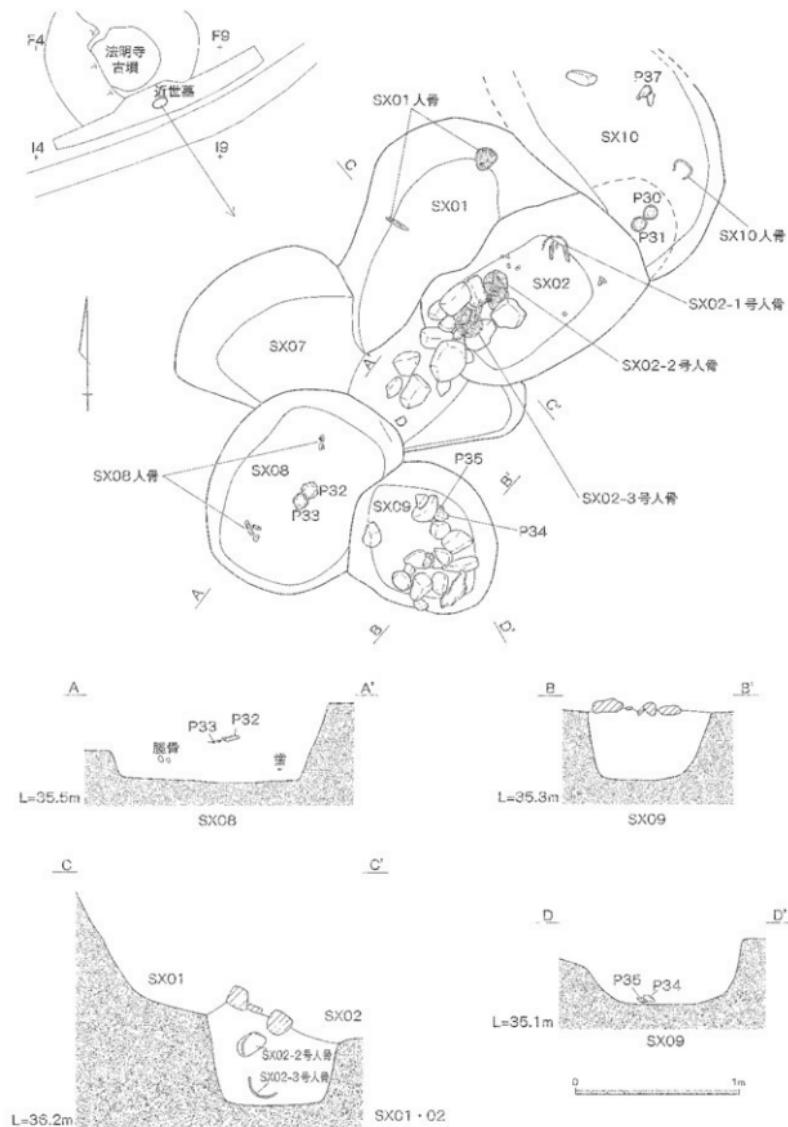
SX02は3体の埋葬が認められた。出土状態から下位・中位・上位とそれぞれ時間をおき、順番に埋葬されたと考えられる。これらは区別することなく一つの土坑に埋葬されていることから、近親関係が考えられ、他より長期間つづいた家族墓と考えられる。また頭骨以外、一部しか遺存していないことから、次の埋葬の際、改葬されたと考えられる。

SX09は円形で規模は小さく、小児の墓であったかもしれない。

これら近世墓の新旧関係はつぎのようである。

SX08の壁面を掘り下げ、その下位からSX07の輪郭を発見した。よってSX07は古くSX08は新しい。

SX09の壁面輪郭はSX08の覆土から検出された。よってSX08は古くSX09は新しい。



第9図 近世遺構平・断面図

SX02の上部砾群はSX01の覆土から検出された。よってSX01は古くSX02は新しい。

SX02の範疇品のカワラケはSX10の覆土中から検出された。おそらくSX10の一部を壊したことによって、墓穴としたためであろう。よってSX10は古くSX02は新しい。

SX02の上部砾群はSX01の覆土から検出された。よってSX01は古くSX02は新しい。

SX02の上部砾群はSX08の覆土より上位から検出された。よってSX08は古くSX02は新しい。

SX01・07・10の傾斜変換点に作られた近世墓は古く、平坦面にあるSX08・02・09の近世墓は新しい傾向がうかがえた。ただし他の墓より新しいとされたSX02の切り合いは、上位で検出された最終埋葬の際、行われたと推定される。

(6) 近世墓地出土の人骨所見

上記近世墓から出土した人骨について、京都大学自然人類学研究室片山一道教授に分析を依頼した。以下、片山教授による所見を、調査担当の文責でまとめた。

これらの入骨に共通していることでは、火葬の痕跡はないこと、頭骨を中心とし、他の部位の骨がごく一部しか認められなかつたことであろう。このことから改葬により片付けが行われ、頭骨を中心に再埋葬されたと推定される。

SX01人骨

上顎骨と下顎骨の一部、脛骨の骨体断片である。下顎骨は左第2大臼歯、上顎骨は左第1大臼歯と小白歯、犬歯の一部が残っていた。歯の大きさと咬耗の程度から、この人骨は男性のものである可能性が高く、死亡年齢は熟年後半から老年であったと推定される。

SX02-1号人骨

頭骨の断片と上腕骨、鎖骨の断片であった。成人骨であろうが、残りが悪く、性別、死亡年齢は特定できない。

SX02-2号人骨

頭蓋骨の多くの断片と下顎骨の一部、第2頸椎の一部があることが判明した。頭骨の遺存状態は良好であり、歯は15本ほどが残る。上左第2小白歯は齒軸が90度回転している。上左第1、第2大臼歯が局的に強くすり減っていることから、歯をなにかの道具として利用していた可能性が高い。歯の大きさと摩耗状態から、この人骨は男性の可能性が高く、死亡年齢は熟年後半から老年であったと推定される。

SX02-3号人骨

頭蓋骨の多くの断片と下顎骨の一部、胸椎の一部があることが判明した。頭骨の遺存状態はかなり良好であり、歯は7本ほどが残る。虫歯は認められない。全体にきしゃやで、体格は小さく、筋肉付着部の発達は弱い。歯の大きさとすり減りが強いことから、この人骨は女性骨の可能性が高く、死亡年齢は熟年と推定される。

SX08人骨

脛骨骨体の断片と下顎骨の一部があった。歯は6本ほどが残る。歯の大きさと摩耗状態から、この人骨は女性の可能性が高いが、死亡年齢は熟年と推定される。

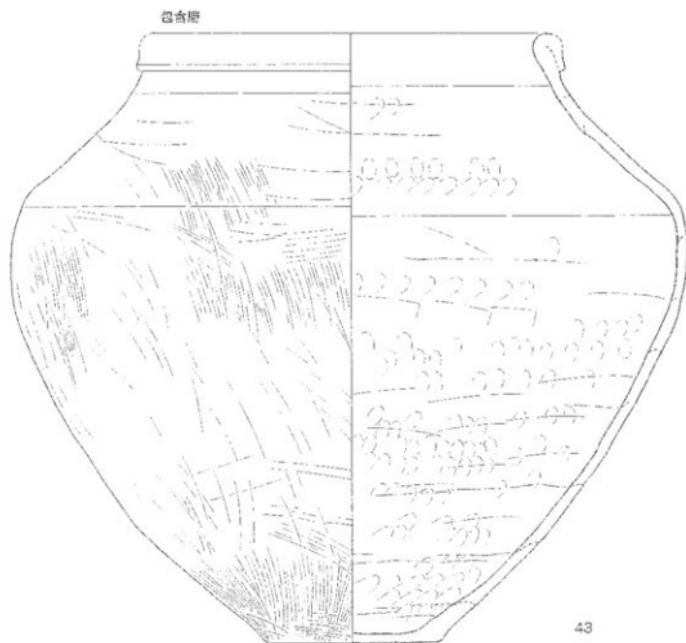
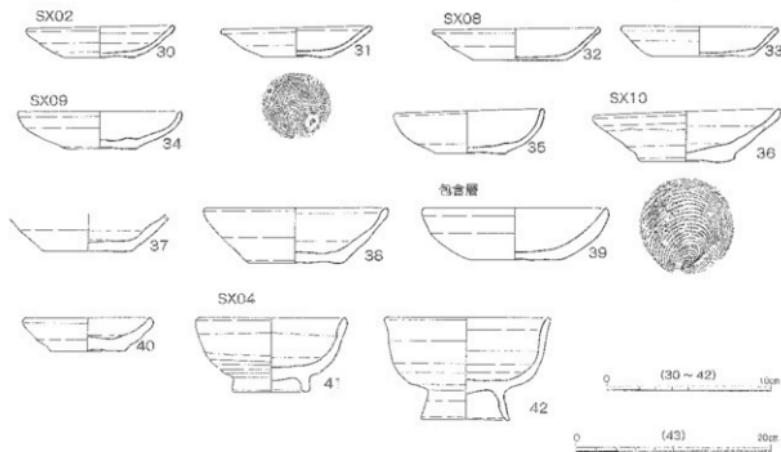
SX10人骨

上顎骨の右第1大臼歯と歯冠の破片であった。歯の摩耗がないことから、子供の可能性が高い。

(7) 近世の遺物

陶磁器・カワラケ・土製品

第10図30～40は近世墓に副葬されたカワラケで、すべてロクロ成形である。30～35は焼成から志戸



第10図 出土遺物実測図2

呂焼など陶器窯で焼造されたと判断され、硬く焼き締まって薄手のグループである。36～40は前者と比較すると、土師質の厚手で焼きのやや軟質のグループの2群に大別される。底部に残る切り離し糸切り痕を比べると、前者の切り離し痕は細く、軽い擦った鉄線など細く丈夫な切り離し具の使用も考えられる。

後者のカワラケのうち、SX10のカワラケの内36が口縁部が外側に開くタイプで、口縁部上位で粘土を巻き足し、その接合痕が外面に残っている。38は口縁部をやや内湾させている。36から38の寸法は30から35に比べ大きい。40は口縁端部を肥厚させている小振りのタイプである。

先に分類した2群のカワラケは、遺構の新旧関係から前者の30～35が新しく、その中でも30・31がさらに新しいとができる。のちに述べるように、SX02の年代は18世紀前半と考えられるので、30・31のカワラケについても同様の年代に比定できる。34・35のカワラケは、遺構の新旧関係によって32・33のカワラケより新しいことが確認される。いずれも18世紀初頭から前葉に比定したい。

SX01から出土した27・28は、このタイプにいわゆる文鏡を伴う例があり、その年代は17世紀末から18世紀初頭・前葉に比定される。SX10は遺構の新旧関係から古いとされ、この墓から出土した36～38のカワラケは、原川遺跡のカワラケ縦年の第IV期に属し（足立1991）、17世紀第3四半世紀頃に比定できる。40のカワラケは、遺構に伴っていないが、その特徴から18世紀前半に比定したい。ほかに墨書きのある第12図17もある。

41・42はSX04から出土した志戸呂焼の碗である。42が18世紀前葉から中頃、41はそれよりやや新しい年代であろう（足立順司1994）。

このほか遺構外から出土した陶器を述べる。53は京焼風の碗で、見込みを蛇の目に釉をぬぐい、鉄絵で山水文を描く。胎土から肥前陶器と考えられる。18世紀前半に比定できる。54は杯（ぐい飲み）である。18世紀代であろうか。胎土から京焼と考えられる。55は長石と灰釉をかけた瀬戸・美濃産の小碗である18世紀末～19世紀初頭であろう（江戸遺跡研究会1999）。56は瀬戸・美濃産の杯で、18世紀後半から19世紀初頭であろうか。57・58は仏壇器である。いずれも17世紀末から18世紀前半である。59は受付灯明皿で、18世紀中頃の志戸呂焼である。60は19世紀初頭の灯明皿で、瀬戸・美濃製品。61は筒形の蓋の蓋で、このタイプの蓋は、火葬された骨を納めて蓋骨器としていることが多い。本例も墓地からの出土であって、蓋骨器であろう。サビ稚掛けで、志戸呂では丹石と呼ばれる鉄分の多い石から採取した釉薬を掛ける。18世紀末～19世紀前半と考えられる。第12図15は土人形の體型である。この型はレンガのような色調で、粘土を焼き締めている。上下の型を合わせて使用した。土人形のモチーフは大黒様であろう。

銅 貨

第12図6～12はSX02から出土した。6～8は一連となっており、その向きは表・裏・裏であった。9は背に「文」があり、寛文8（1668）年から天和3（1683）年まで戸戸で鋳造された「文鏡」である。11から13は元禄10（1697）年以降に鋳造された新寛永である。これからすると18世紀初頭から前半の組み合わせを考えてみたい。他の鏡は墓地からの採集鏡であるので、その多くは六道鏡であろう。6は火熱を受けており、他の鏡貨にはみられない特徴である。火薬に伴う六道鏡であろうか。寛永通宝の鉄錢1枚も採集されている。渡米鏡がみられないことも、今回調査された近世墓が17世紀第1四半世紀までしかのぼり得ないことの状況証拠ではないだろうか。

銅・鉄製品

H7区を中心にして銅・鉄製品が出土した。出土層位は近・現代の墓地造成によって混乱されていたため、時期は不明である。釘は木と木をつなぐ役割のため、小物から住宅など建築や土木工事の接合具として広く使われる。19・23についても木材を接合していたためか、木質が鉄に付着していた。

18の銅製品は火熱を受け、ゆがんでいる。厚さは2.5mmを測るが、破片のため全体の寸法も、いったい何の銅製品かも不明である。墓地からの出土品からすれば、それに関係する棺を埋蔵する飾り金具や

葬具なども考えられるが、銅製のこれほどの大きさからその可能性はきわめて低い。光背など仏像の一部分とも考えたが、円形に巡る彫線を二段に巡らしている形状から、むしろ仏具の梵音具である鈔口の塗座区と考えられる。

19は中央部にU字状に凹む受け部をもつ不明鉄製品である。木質が受け部底面に残っていることから、直径8~9mmの木棒を受けたものと思われ、接合具と考えられる。製品の天地は不明のまま図示したので、その縦横の表現に横拵があるわけではない。

20は頭部を折り曲げた折釘、22は基部先端を叩き潰して曲げた頭巻釘、23は木質が付着していることから鱗番であろう。21は頭部を欠くが、断面が方形を呈する釘であろう。20~22の釘は断面が方形であることからすれば、いずれも和釘である。

石製品

第12図16は自然石の表面に墨痕かと思われる痕跡を認めた扁平な石である。礫石経のように絆石もしくは梵字を書写する例もあり、赤外線カメラを使用して確認したが、明確ではなかった。

石塔

事前調査の段階において、法明寺古墳墳丘上の無縁墓地や法明寺の歴代墓（無縁塔）の周辺から、中世の石塔が認められていた。今回、発掘調査において中世の石塔が出土したこともあるって、調査報告書作成にあたっては、これら以前から知られていた石塔についても、発掘資料と一連の資料として取り扱い、これら石塔も含め、資料化して報告する。

石塔は宝篋印塔、組み合わせ五輪塔、一石五輪塔、近世墓塔基礎の部材である。石材は砂岩で、淡褐色を呈する例が多く、これはいわゆる「日坂石」の特徴に近い。それとは異なる岩質は他の産地帯と考えられる。

宝篋印塔の相輪のうち、判別できるものについては、謂花弁なしと線刻による花弁を彫りだしている例（第13図3）がある。九輪は太めの沈線で輪部を表し、九輪の段数も省略されている。笠は露盤や隅筋りの輪郭表現ではなく、軒と隅筋りの段差はないタイプである。基礎は輪郭表現のない素面である。

組み合わせ五輪塔の部材のうち、空風輪は第14図16のように、石材を凸状に削りだして連結のためのホゾを作り出したタイプと風輪と火輪の中央に小穴をうがって、桟状の木材で連結するタイプの第14図15が認められた。火輪は、空風輪のホゾを受ける凹部をうがったもの第14図22がある。水輪は梵字のないタイプである。一部に火熱を受けた痕がみられた。地輪は粗雑な整形痕を残す。この整形痕を残す面を下部とした。

一石五輪塔は、直方体の石材を削りだして五輪の各部を造りだしている。共通して火輪に軒部の表現があるが、地輪は方形と長方形を呈する2種類のタイプがある。

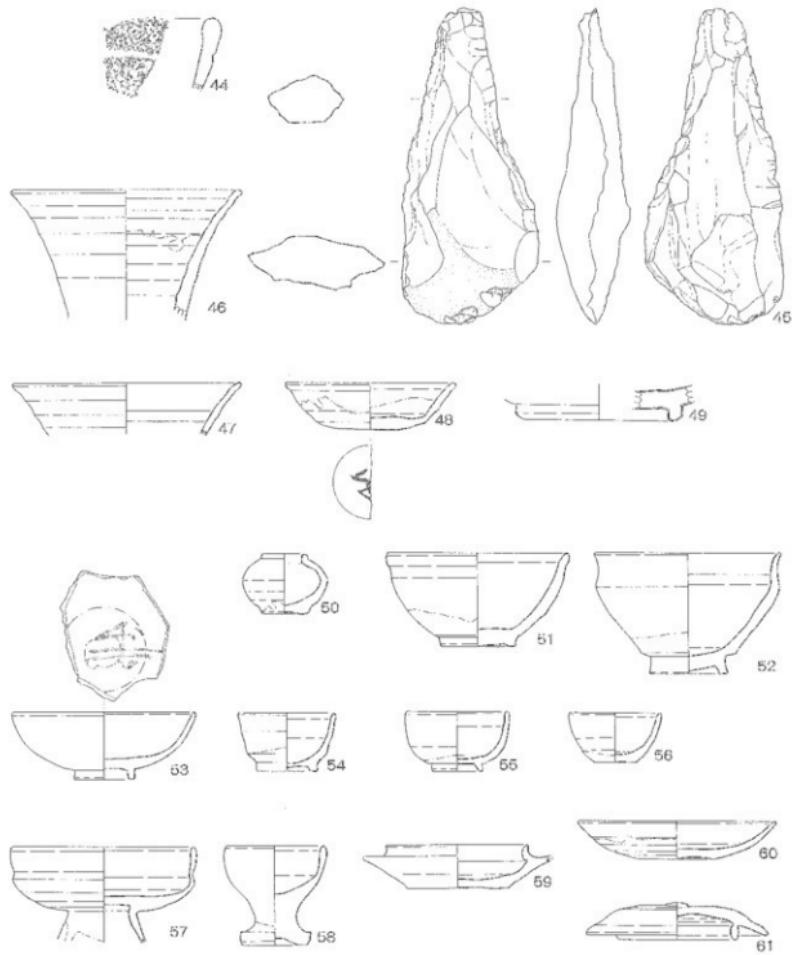
第15図34は板状の基礎で、近世の墓塔に伴うと考えられる。

石塔については、加工痕が残っていた。

第4節 繩文時代の遺物

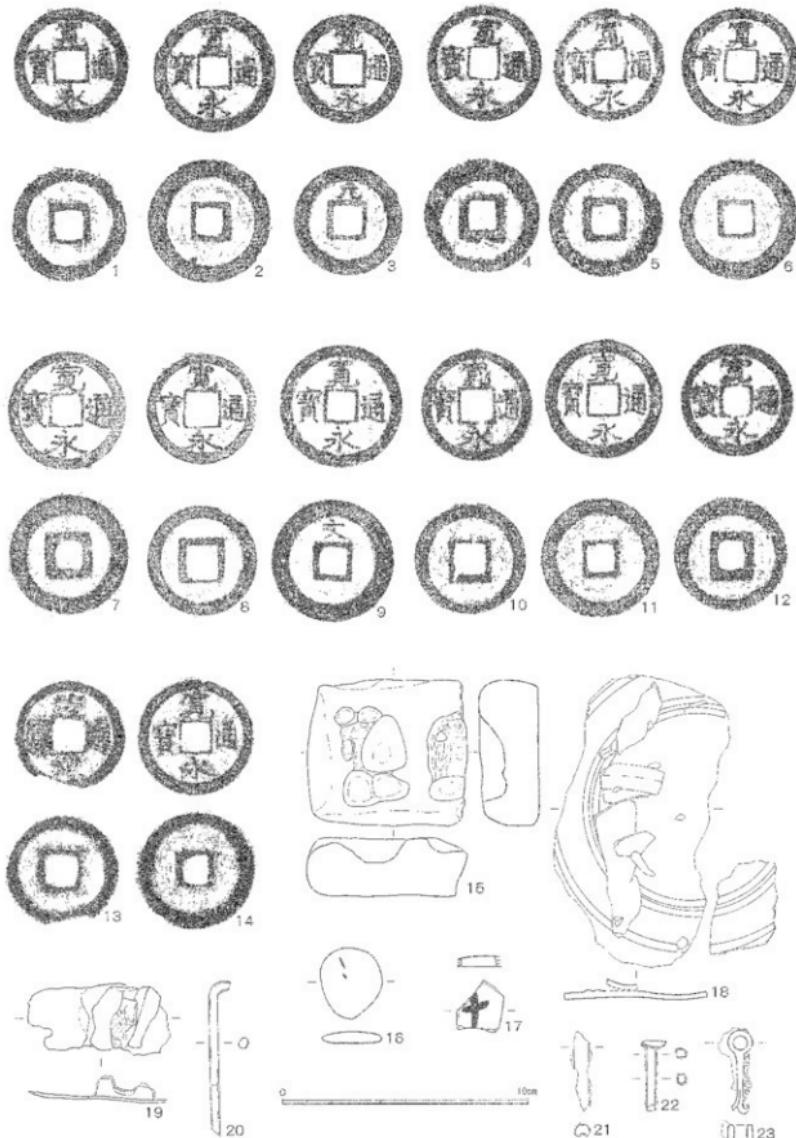
第11図44は擾乱層から出土した縄文土器である。口縁部に単斜縄文と沈線を巡らしている。荒い胎土細かい石粒を含む。後期中葉から晩期初頭の土器であろう。

第11図45は長さ19.3cm、幅8.2cm、厚さ4.5cmを測る打製石斧である。硬質砂岩の円礫を表・裏の両方からたたき割り、両面から荒い調整によって刃部をつくっている。一部に円礫の自然面を残している。ほかに黒曜石の剥片も出土した。縄文時代人が何らかの理由でこの地を訪れ、その痕跡を残したものであろう。

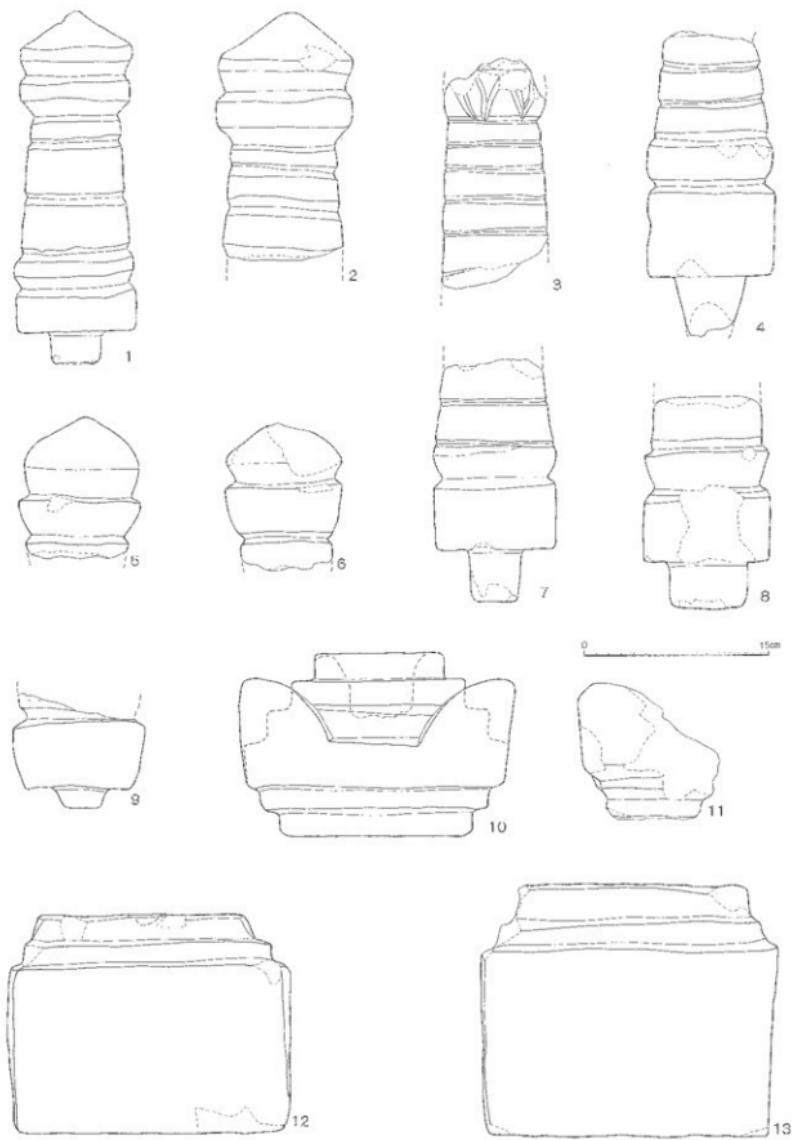


0 10cm

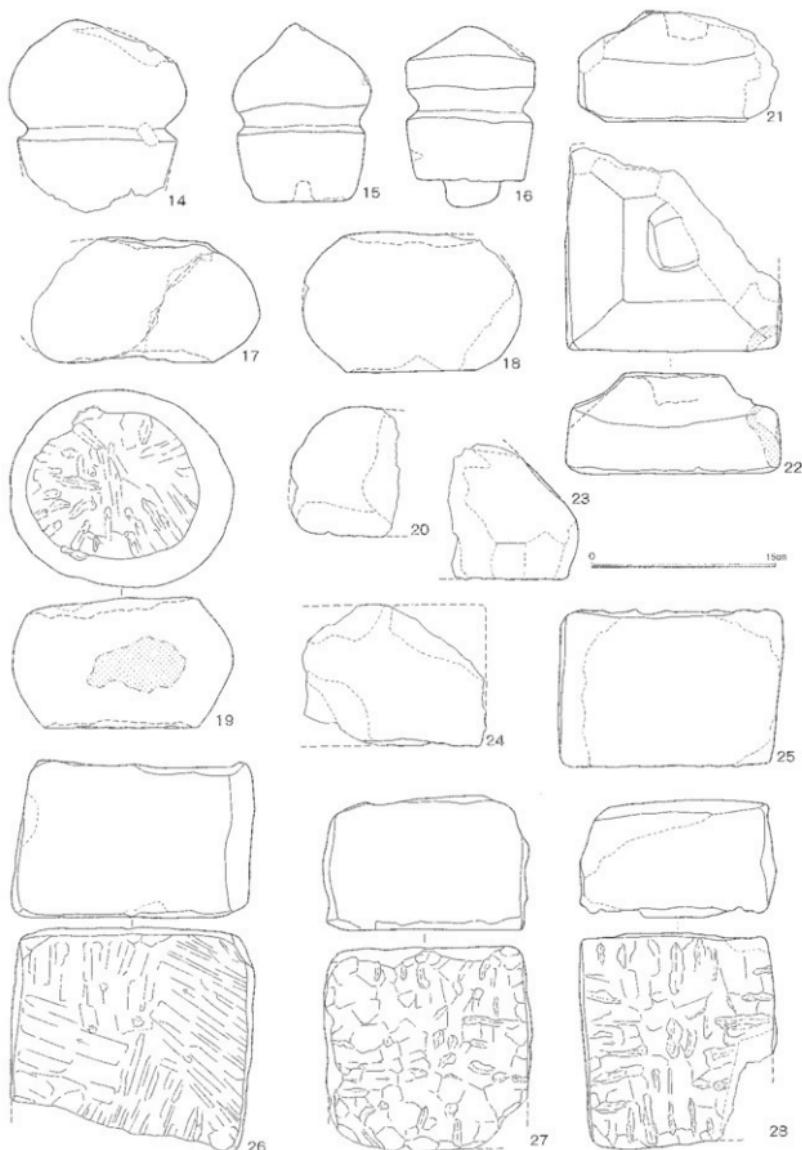
第11図 出土遺物実測図3



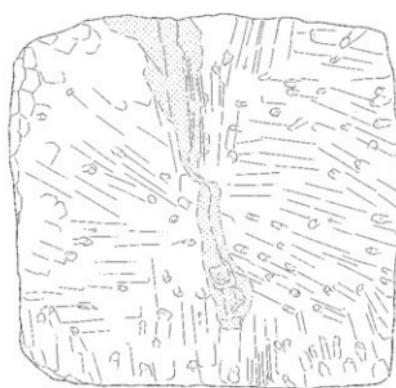
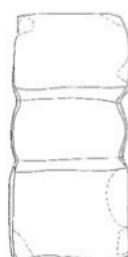
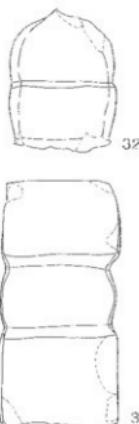
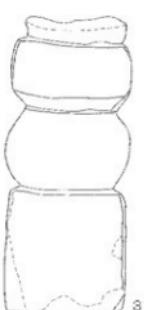
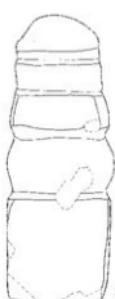
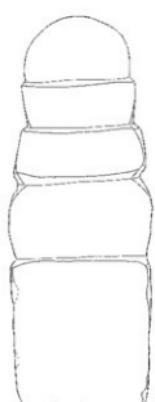
第12図 出土遺物类别図4・拓影圖 (1:1)



第13図 出土遺物実測図5



第14図 出土遺物実測図 6



0 15cm

第15圖 出土遺物實測圖7

第5章　まとめ

第1節 古墳はどのようにつくられたか

今回の発掘調査で検出できた遺構と遺物は前章のとおりである。最後にこの法明寺古墳に残された遺構と遺物のあり方を手がかりとして、本遺跡の歴史的意味を数項目にわたって考え、この発掘調査報告書のまとめとしたい。

第1に調査所見に基づいて法明寺古墳の規模について考えたい。

すでに述べたように、墳丘の高さについては5.5mという所見をえた。古墳の直径については調査区東側において、旧表土とその下位層である黄色土を掘削し、古墳の裾部を明瞭に造っていたことから東側部分の半径が明瞭となった。ところが西側については茶園開植によって、旧表土はもちろんのこと、黄土とそれより下位層まで大きく掘削され、古墳裾部を残していなかった。そのため西側調査区断面等を検討し、その傾斜変換点や古墳盛土の残存状態から古墳の西側墳端を推定した。現状の姿が茶園開植によって変容していることが、今回確認されたため、調査区東側の所見と西側で推定された墳端に基づき、法明寺古墳の直径を35.5m～36mと推定しておきたい。

第2に法明寺古墳南部の墳丘断面を調査し、本文第4章第2節のような所見をえた。この所見を検討し、この古墳がどのようにしてつくられたかを検討したい。

古墳の東側には墳丘盛土の探査痕SX12が認められた。この深さは旧表土0.7mと黄色土0.3m、計1m（最深部での数値）を掘削していたこととなる。この探査痕は規格に基づいて古墳の端部を円形に削り出すものの、盛土に見合うだけの土量を確保することを第一義としていたと考えられる。そのため外周部は周溝のような明瞭な立ち上がりは認められなかった。掘削痕の幅は一定ではなく深さも凹凸があって、臺城を区画するなどの規格された遺構とは考えられなかった。

探査した旧表土（黒色土）と黄色土は別々に集められ、それぞれ分けられ盛土されたことは、すでに本文で指摘した。このような土質の異なる土を交互に叩き締め盛土することは墳丘の崩壊や地滑りにかかる意味があるという（石塚久則 1992）。本例はこの工法によって、腰高の墳丘法面を守ったと考えられる。

墳丘盛土工法については、重要な所見が得られたことは本文で述べたところである。古墳の構築範囲について厚さ0.7m程の旧表土をそのまま残した上に順次盛土していた。他の例では旧表土を取り除いて整地し、盛土することがあるが、法明寺古墳の場合、黄土と旧表土の黒色土が盛土の土圧に耐えられたと判断されたからであろう。

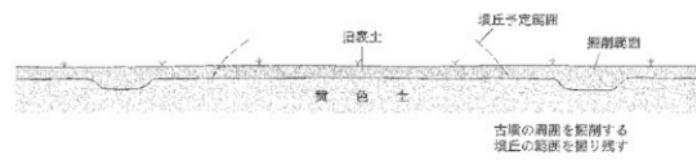
墳丘の外周には土手状の盛土を巡らし、さらに水平になるまで中心部へ向かって充填するように盛土している。

さらに水平面に土手状盛土を巡らして、新たな盛土を重ねている。この結果、墳丘は底面から墳丘上位まで、土手状盛土の段を数段重ねる工法によって造られていることが判明した。このことは立体構築物である古墳をきわめて計画的に規格し、造り上げたということとなろう（三田敦司 2001三昧縦塚古墳）。

第2節 中世石塔について

中世石塔は前述のとおり、墳丘上等の墓地周辺に集められていたもので、本来中世墓地に伴っていた

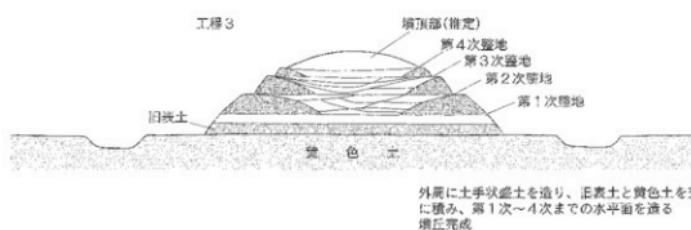
工程1



工程2



工程3



第16図 墓丘築造工程復元模式図

供養塔が寺院に隣接した墓地を管むにあたり近世以降に整理されたものであろう。しかし、石塔の部材は周辺地域で出土したものなどが近接寺院に持ち込まれることも多く、留意したい。

今回図示した五輪塔・宝篋印塔の部材は全て砂岩製で、その多くは日坂・金谷周辺の東遠江産と推定される、礫粒を顯著に含む泥岩質の砂岩（砂岩C）である。ただし、宝篋印塔の笠や基礎、一石五輪塔の一部（第13図10・13、第15図32・33）は森周辺の中遠江産とみられる石英粒を顯著に含む白色砂岩（砂岩B）の製品である（松井・木村・溝口・篠ヶ谷・椿原 2007）。駿河・遠江地域では15世紀後葉以降に砂岩製の小型五輪塔・宝篋印塔が爆発的な勢いで造塔されることが明らかとなっており、それらは新式石塔として大別される（松井・木村 2006）。当遺跡で確認されたこれら部材も新式石塔として捉えられるが、新式石塔は銘文が入らないため正確な造塔年代を探るのは困難である。以下、新式石塔を調査対象とした東光寺石塔群、鬼岩寺石塔群の調査成果を参考しながら概観してみたい（松井・木村 2006、藤枝市郷土博物館 2008）。

宝篋印塔については相輪の線刻化及び連弁の省略化、笠の隅筋の素面化など、新しい要素が見受けられるが、笠・基座の段表現が残るなど最も形骸化が進む段階ではないことから、16世紀代前～中頃の製品と考えられる。ただし、第13図3の相輪については線刻ながら請花の花弁表現が残り、古い要素を残す。五輪塔は形状のわかるものは少ないが、空風輪の境の線刻化、火輪の扁平化、水輪の簡略化などから、新式石塔としてもかなり形骸化が進んだものと評価でき、16世紀代前～中頃の製品と推定される。第14図14の空風輪、18の水輪、25の地輪は調整の簡略化が少なく比較的作りが丁寧なため、これらの中でも古手の部類に入る。一石五輪塔はいずれも空風火水地の各部位の彫り込みが浅く、各部位の簡略化が顕著であるため16世紀後葉の製品と推定されるが、第15図31は水輪部が比較的丁寧でやや古くなる要素を持ち、第15図30の小型品は各部位の彫り込みの線刻化が顕著で最も新しい要素を持つ。

以上、法明寺古墳で確認された中世石塔について述べたが、これらはおおむね東遠江を中心とした地域で生産された石塔である可能性が高く、16世紀代に製作されたものと推定できる。冒頭に述べた理由によりその全てとは言い切れないものの、当遺跡周辺で營まれた中世墓に伴うものと考えられる。今回の調査で確認された墓道構は13世紀代の集石墓と近世土坑墓であるため、石塔と墓構が直接結びつくものではないが、中世を通じた墓域がこの地に造営されていた可能性は高い。

第3節 近世墓について

つぎに墳丘とその裾部から発見された近世墓について検討してみたい。

今回発見された法明寺古墳墓地は、近世農村部の共同墓地の一角に位置づけられる。検出された近世墓は土坑に直葬されたいわゆる土葬であった。副葬品はわずかにカワラケと六道鏡であった。墓の年代は、出土したカワラケや渡来鏡は認められない六道鏡の構成から、その年代は17世紀中葉から18世紀初頭・前半と考えられる。

周辺からは室町後期・戦国期の石塔などが発見され、すでにそれ以前から墓地として利用されていたことが推定された。天文元（1532）年の「攝津尼崎墓所録」には、「石塔并塔婆等ちり失る時者、ひしり方より可弁之。各々墓所をあらたむる時、不可有連亂者也。」とある。このことからすれば、本来、大事にされるべき石塔并塔婆は、部材のみとなっており、近世の「墓所をあらたむる時」には、とりかたづけたこととなろう。そこには中世から近世への連続性は少ない。

中世後期には六道鏡とカワラケを伴う葬制が普及し、さらに遠江地方においては曹洞宗の教祖の拡大とともに、火葬も普及していった。そこには武士以外においても、その階層差によって土葬と火葬の違いが認められた（足立順司 1994）。しかしながら本例のように土葬の復活がみられた。やはり中世から近

表3 錘鼓型鈴口一覧

番号	名 称	開 係 先	年 号	西暦	撞座	耳
1	徳山智者山神社	川根本町(本川根町)	貞和三年	1347	鉦鼓	両
2	富幕	浜松市(引佐町)	延文二年	1357	鉦鼓	片
3	大島銀音堂	碧田市(福田町)	延文五年	1361	鉦鼓	片
4	薬師寺銘	袋井市	応安七年	1374	鉦鼓	
5	松尾末社若宮銘	磐田市	至德二年	1385	鉦鼓	両
6	刑部御厨清福寺銘	浜松市(細江町)	明徳三年	1392	鉦鼓	片
7	熊野三所大権現銘	森町	応永四年	1397	鉦鼓	
8	天宮神社	森町	応永六年	1399	鉦鼓	片
9	岡田源千手堂銘	磐田市	応永七年	1400	鉦鼓	
10	千又かね銘	静岡市	応永十二年	1405	鉦鼓	
11	坂田禪龍禪寺銘	浜松市	応永十二年	1405	鉦鼓	
12	賀茂神社	森町	応永十四年	1407	鉦鼓	片
13	門朽	浜松市(水窪町)	応永二十年	1413	鉦鼓	片
14	熊野十王堂銘	磐田市	永享十一年	1439	鉦鼓	
15	伊良湖大明神銘	愛知県豊田市(下山村)	永享十二年	1440	鉦鼓	両
16	大土蛟牛頭天王	浜松市(春野町)	文安元年	1444	鉦鼓	両
17	自得院	森町	文安三年	1446	鉦鼓	両
18	河名楽師堂	浜松市(引佐町)	文安四年	1447	鉦鼓	両
19	中町屋六所大明神銘	浜松市	宝徳三年	1451	鉦鼓	片
20	片吹	森町	長祿四年	1460	鉦鼓	両
21	胡桃平	浜松市(春野町)	寛正六年	1465	鉦鼓	両
22	設楽牛頭天王銘	愛知県設楽郡	寛仁三年	1469	鉦鼓	両
23	八剣神社	浜松市(水窪町)	文明三年	1471	鉦鼓	両
24	大栗安	浜松市(天竜市)	文明四年	1472	鉦鼓	
25	東雲名	浜松市(天竜市)	文明六年	1474	鉦鼓	両
26	賀茂三所大明神	森町	文明十九年	1487	鉦鼓	両
27	祿田郷中山寺銘	森町	永正九年	1512	鉦鼓	両
28	安養寺白山銘	掛川市	永正十七年	1520	鉦鼓	両

凡例

開係先の()内は旧自治体を示す
愛知県に現存するものや現存しないが拓本や図で確認した例も含む

智者山神社鈴口



智者山神社鈴口 (側面)



鉦鼓型鈴口



東光寺鈴口

第17図 錘鼓型鈴口ほか

世への断絶がみられるのか、単に被葬者の階層によるものか、課題として残った。

六道銭については、鈴木公雄の研究によって、その年代差と貨幣流通を反映しているとされた（鈴木公雄 1991）。寛永通宝が出現する以前は渡来銭を六道銭とするが、ビタ銭は少ない。近年になって森町文殊堂SF53墓、宇篠蓮台SF03墓において、永樂通宝のみで構成される六道銭が報告された（田村 2008）。このことは、六道銭においてもある時期に選銭を行ったこととなる。おそらく天正の検地以後、北遠地域に永高代銭納施行される以後であろうが、これは短期間のことで、地域限定であろうか。選銭が行われたとすれば、すべての階層に六道銭副葬が行われなかつた可能性が高い。この辺も今回検出された17世紀代の土坑墓に、六道銭が認められなかつたことと関係するのであろうか。今後、類例を重ねたのも、後考を待ちたい。

第4節 出土鰐口について

発掘調査において仏具の一種である梵音具が出土することはきわめて少ない。おそらく寛熱を受けるような火事に被災し、破損したため捨てられたものと推定される。法明寺古墳から出土した鰐口は壇座区に紋様はなく、ただ囲線をめぐらすのみであった。鰐口は仏具の性格から壇座に蓮華文、珠文もしくはそれから派生し変形した文様で飾ることが多い。本例のような囲線のみで壇座を表すこのタイプは、のちに述べるように14～16世紀前葉の東三河から中遠地域に多いタイプである。

このタイプの鰐口も内区と錦帶を分ける囲線の数によって、さらに1条、2条、3条の例に細別できる。徳山智者山神社鰐口から、このタイプは鉢底を両面合わせた形態を源流とすると考えている。よってこのタイプを鉢型と分類したい。蛇足ながら徳山智者山神社鰐口は、側面に貞和3（1347）年の紀年銘をもつが、その形態と製作技法から13世紀代まで遡ると考え、紀年銘は追刻と考えている。おそらく文永5（1268）年頃陀守銘をもつ鰐口とほぼ同じ頃の制作であろう。

さてこの鉢型鰐口は、別表のように東三河、西遠、中遠、北遠から大井川上流地域に分布し、東遠江には少ない。この分布は鎌物師集団の流通範囲を表していると考えている。

鳥田市東光寺ににある鰐口に「賀呂庄黒澤山宮御前 文安五年 戊辰 十二月吉日 大工十郎 柴宜沙弥道玄」の銘がある。奉納先の黒澤とは、法明寺古墳のさらに上流菊川市倉沢のことである。この鰐口の壇座は、八つの刺先と中心部に5つと1つの珠文を組み合させた文様である。おそらく八葉の連弁が大きく変形した文様と考えられるが、このタイプの鰐口は、他の類例から鳥田市（旧金谷町周辺）付近にあった東金谷の鎌物師集団の作と考えられる。この特徴の鰐口の分布は東遠江から西懸河に多い。すると鉢型鰐口と異なる流通圏をもっていたと考えられる。

法明寺古墳出土の鰐口は鉢型鰐口であって、中遠以西の鎌物師集団の特徴をもっている。このことから、中世にあっては佐野・減潤郡の一部は、両者の鎌物師集団の流通が重複する地域であったと考えることもできよう。鰐口の資料としての価値は刻まれた銘文だけではなく、型式的特徴とその分布を追求することで、今まで見えなかった鎌物師集団やその流通圏までも見えることもあろう。

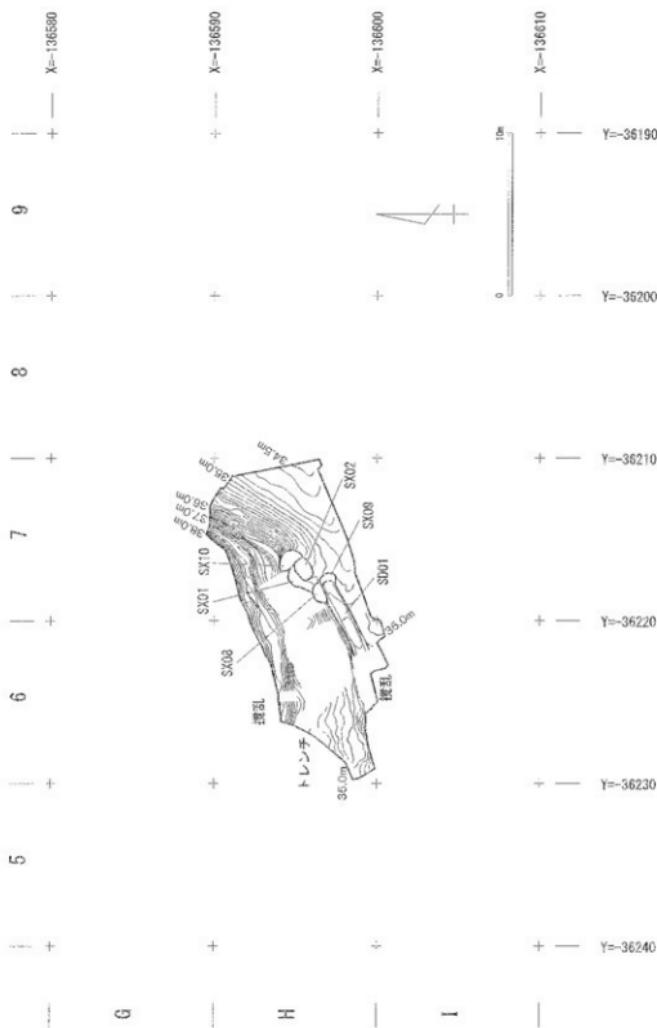
あとがき

発掘調査及び報告書作成・執筆にあたっては、次の方々・機関から御教示や御協力を賜った（敬称略）。記して感謝申し上げます。

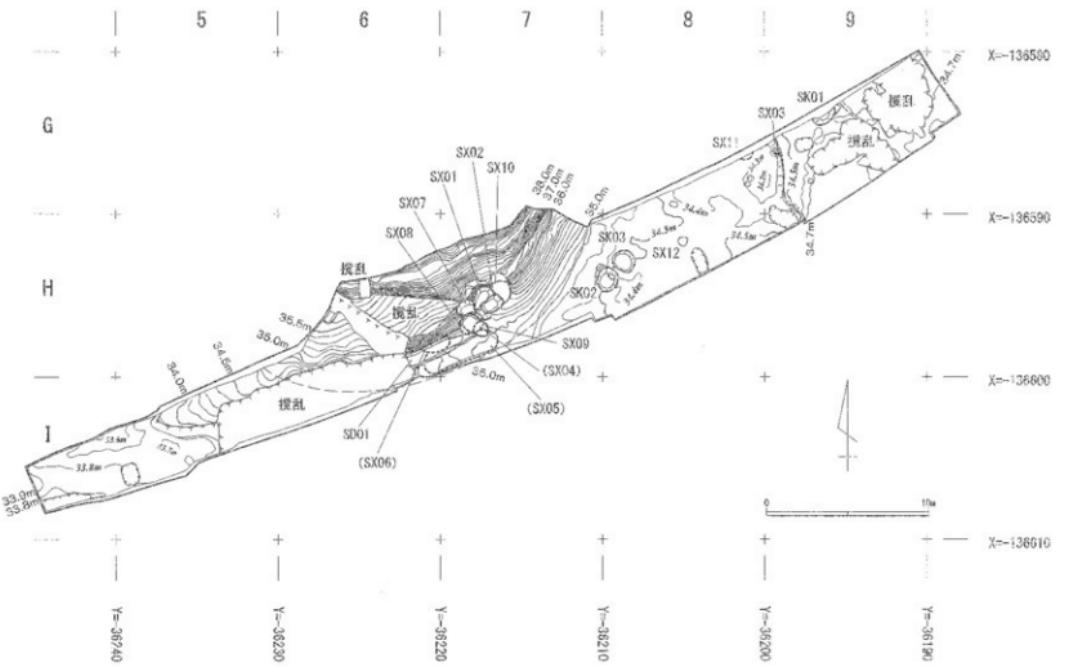
北原勝 北原勤 戸塚和美 鬼澤勝人 松井一明 大橋保夫 塚本和弘 河合修 和田地区自治会
佐藤郁太 大隅信好 伊藤美鈴

引用・参考文献

- 赤羽一郎・中野暉久 1994『中世常滑焼をとおって資料集』
- 足立順司 1991『原川遺跡IV』
- 足立順司 1994「消費地出土の初山焼・志戸呂焼」『地域と考古学』
- 足立順司 1994「磐岡県下の中世六道鏡」『出土鏡貨2』
- 磐田市教育委員会 2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 石塚久則 1992「豪石」『古墳時代の研究』
- 江戸遺跡研究会 2001『陶磁器編年表』『江戸考古学研究事典』
- 河合修 2001「青灰色のうつわ」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要 第8号』
- 篠原修二・加藤賛二 1983『石畳追跡』
- 篠原修二 2007「赤谷遺跡の概要」『赤谷尾根遺跡調査報告書』
- 鈴木公建 1999『出土鏡貨の研究』
- 田辺昭三 1990「赤谷遺跡」『静岡県史 考古資料編1』
- 田村隆太郎 2008『森町円田丘陵の古墳群』
- 榎本利弘 2007「まとめ」『赤谷尾根遺跡調査報告書』
- 藤沢真祐 2008『中世瀬戸窯の研究』
- 松井一明・木村弘之 2006「島田市東光寺の中世石塔について」『東光寺五輪塔遺跡』島田市教育委員会
- 松井一明・木村弘之・溝口彰彦・篠ヶ谷路入・祐原靖弘 2007「駿河中・西部地域の中世石塔の出現と県間・静岡県下における中世石塔の研究3」『静岡県博物館協会研究紀要第30号』静岡県博物館協会
- 藤枝市郷土博物館 2008『駿河鬼岩寺中世墓・中世石塔群調査報告書』
- 三田敦ほか 2001『三咲線塚古墳』



第18圖 法明寺古墳（古墳面）遺構全體圖



第19図 法明寺古墳（中・近世面）遺構全体図

表4 出土土器観察表

単位=cm

押抜	回版	遺構・層位	種別	器種	口径	器高	底径	高台径	色調	産地	備考
7-1	13-1	SX05	山茶碗	碗	(14.20)	4.20		(7.00)	灰白		ヘラ彫き模様あり(底)スノコ底あり
7-2		SX06	山茶碗	小皿	(8.15)	1.70	3.70		灰黄	東遠系	
7-3	13-3	SX05下層	山茶碗	小皿	7.55	1.70	4.00		灰	東遠系	圧痕あり(底)
7-4	13-4	SX05下層	山茶碗	小皿	7.80	1.65	4.70		灰白	東遠系	圧痕あり(底)
7-5	13-5	SX05下層	山茶碗	小皿	6.95	1.55	4.35		褐灰	東遠系	
7-6	13-6	H7	山茶碗	碗	(15.80)	4.50		(6.80)	暗灰黄		スノコ底あり
7-7	13-7	H7	山茶碗	碗	(14.40)	4.35		(5.00)	灰黄褐		焼成不良スノコ底あり
7-8		15	山茶碗	碗	(13.00)	4.20		(6.00)	灰	東遠系	スノコ底あり
7-9		15.5	山茶碗	碗	(12.40)	4.00		(5.80)	灰黄	東遠系	
7-10		H8	山茶碗	碗	(13.00)	3.50		(5.00)	褐灰	東遠系	スノコ底あり
7-11		H7	山茶碗	碗	(13.90)	5.90		(7.10)	灰黄褐	東遠系	スノコ底あり
7-12		H7	山茶碗	碗	(15.70)	4.90		(7.30)	灰褐	東遠系	焼成不良スノコ底あり
7-13		16表土	山茶碗	小皿	(7.60)	1.65	(4.00)		灰黄	東遠系	自然釉付着
7-14		15.5	山茶碗	小皿	(7.20)	1.55	3.90		灰	東遠系	
7-15	13-15	15.5	山茶碗	小皿	6.55	1.55	4.35		灰	東遠系	
7-16	13-16	15	山茶碗	小皿	(7.80)	2.30	(4.70)		灰	東遠系	
7-17	13-17	15.5	山茶碗	小皿	7.55	1.75	4.40		褐灰	東遠系	
7-18		H7	山茶碗	小皿	(7.30)	1.80	(3.80)		褐灰	東遠系	
7-19		H7	山茶碗	小皿	(7.80)	1.65	(3.80)		灰	東遠系	
7-20		15.5	山茶碗	小皿	(6.75)	1.65	(3.90)		にぼい縁	東遠系	
7-21	13-21	15.5	山茶碗	小皿	7.15	1.70	4.90		灰白	東遠系	
7-22	13-22	H7	山茶碗	小皿	(8.15)	1.40	(3.70)		灰黄		
7-23		117	山茶碗	小皿	(8.45)	1.45	5.40		灰	東遠系	
7-24		G9	山茶碗	小皿	(6.90)	1.90	(4.40)		縁灰	東遠系	
7-25	13-25	SX91	山茶碗	碗	14.70	4.50		6.70	灰黄褐		内外面保付着 焼成不良
7-26	14-26	SX11施土	陶器	水滴			(4.20)	3.30	にぼい赤褐 釉…黒褐色 鉄釉		
7-27	14-27	SX91	土師質	カワラケ	(9.80)	2.80	(5.50)		縁		
7-28		SX91	土師質	カワラケ	(9.90)	2.40	(5.30)		縁		
7-29		SX02淹込み	山茶碗	鉢	(27.60)	(7.60)			灰	東遠系	自然釉付着
10-30	14-30	SX02	土師質	カワラケ	8.80	1.85	4.20		淡黄緑		
10-31	14-31	SX02	土師質	カワラケ	9.00	1.80	4.00		縁		
10-32	14-32	SX05	土師質	カワラケ	10.05	1.95	5.65		淡黄緑		
10-33		SX08	土師質	カワラケ	(9.50)	1.80	5.80		淡黄緑		
10-34	14-34	SX09	土師質	カワラケ	9.80	2.30	4.00		縁		
10-35	14-35	SX09	土師質	カワラケ	9.00	2.60	4.25		縁		

掲番	図版	遺物・層位	種 別	器 種	口 径	器 高	底 径	高台径	色 調	産 地	備 考
10-36	14-36	SX10	土師質	カワラケ	11.25	3.05	6.00		浅黄橙		粘土雜々板あり
10-37		SX10	土師質	カワラケ		(2.30)	(6.30)		にぼい橙		
		SX10	土師質	カワラケ	(11.00)	3.35	6.00		にぼい橙		
10-39		H7	土師質	カワラケ	(11.20)	3.15	(5.40)		橙		
10-40	14-40	I5.6	土師質	カワラケ	(7.60)	2.05	4.50		澄		
10-41	14-41	SX04	陶器	碗	8.80	4.55		4.75	露胎…にぼい橙 釉…灰褐	志都呂焼 鉢	
10-42	15-42	SX04	陶器	碗	9.90	6.25		5.40	露胎…にぼい赤褐 鉄釉…暗褐 胎…明黄褐	志都呂焼 2度掛け (鉄釉+釉)	
10-43	14-43	I7表探	陶器	甕	(40.00)	62.70	(18.20)		にぼい黄橙	常滑	
11-44		I6	織文土器	鉢(片)		(4.50)			褐色		長石粒を多く含む
11-45	15-45	H7	陶器	花瓶	(13.70)	(8.00)			露胎…灰白 内面…灰白 外面…オリーブ	瀬戸、美濃 灰釉	
11-47		G8.9	陶器	瓶類	(13.80)	(3.20)			露胎…灰白 胎…オリーブ 黄	古瀬戸 灰釉	内面に沈線2条あり
11-48	15-48	G9	陶器	縁軸皿	10.00	2.85	4.40		灰黄 釉…オリーブ色 ガラス質	瀬戸、美濃	豊晩(底部)
11-49		確認調査 T31層 (褐色土)	青磁	皿		(2.20)		(10.20)	露胎…灰白 釉…オリーブ灰 铁锈…にぼい赤 褐		高部外面に鉄錆
11-50	15-50	G9	陶器	小甕	(2.50)	3.70	2.60		灰黄釉…灰白	古瀬戸	
11-51		G9	陶器	天目茶碗	(16.80)	5.70		4.60	露胎…灰白 釉…黒	瀬戸、美濃 灰釉	
11-52	15-52	H7	陶器	天目茶碗	(11.00)	7.40		4.70	露胎…灰白 鉄釉…褐	瀬戸、美濃 灰釉	
11-53		H7	陶器	碗	(11.00)	4.10		3.70	露胎…灰白 釉…灰白	肥前の土 灰釉	京焼風 内面に鉄錆
11-54	15-54	H7	陶器	环	5.80	3.60		(3.70)	露胎…にぼい橙 釉…にぼい橙	京焼 灰釉	
11-55	15-55	H7	陶器	小甕	(6.20)	3.70		3.10	露胎…灰白 灰釉…灰白	瀬戸、美濃 灰釉 (灰+わずかに長石)	
11-56	15-56	H7	陶器	环	5.40	3.05	2.60		露胎…浅黄橙 灰釉…浅黄	瀬戸、美濃 灰釉 (长石+灰)	
11-57	15-57	H7	陶器	仏龕器	11.00	(5.90)			露胎…灰褐 釉…褐	志都呂焼 雜燒	
11-58	15-58	H7表土層	陶器	仏龕器	5.90	6.10	3.90		露胎…灰褐 釉…暗褐	志都呂焼 灰釉	
11-59		H7	陶器	灯明皿	(8.60)	2.70	(6.20)		露胎…燈 釉…灰赤	志都呂焼 18C 灰釉	
11-60	15-60	H7	陶器	丸皿	(11.80)	2.30	(4.40)		露胎…灰白 釉…灰灰	瀬戸、美濃 舞深井釉	
11-61	15-61	H7表土	陶器	蓋(磁骨壺)	(7.10)	2.30			露胎…灰褐 釉…灰釉	志都呂焼 鉢	最大径(11.0) つまみ径(1.4)
12-17			土師質	カワラケ		(0.40)			にぼい橙		墨客「十」

表5 出土銭貨観察表

単位=cm・g

押 国	国 版	錢 名	遺 構	グリット	直 径	厚 み	重 さ	備 考
12-1	16-1	寛永通宝	近世	表採	2.37	0.11	1.81	新寛永
12-2	16-2	寛永通宝	近世	H7	2.56	0.13	3.10	新寛永
12-3	16-3	寛永通宝	近世	H7	2.26	0.12	2.43	背元
12-4	16-4	寛永通宝	近世	H7	2.37	0.10	1.68	古寛永ス宝
12-5	16-5	寛永通宝	近世	H7	2.36	0.11	2.13	新寛永
12-6	16-6	寛永通宝	SX02近世	H7	2.47	0.13	3.66	新寛永
12-7	16-7	寛永通宝	SX02近世	H7	2.46	0.10	3.14	古寛永
12-8	16-8	寛永通宝	SX02近世	H7	2.28	0.10	2.12	新寛永
12-9	16-9	寛永通宝	SX02近世	H7	2.54	0.13	2.95	背文
12-10	16-10	寛永通宝	SX02近世	H7	2.30	0.10	2.04	新寛永
12-11	16-11	寛永通宝	SX02近世	H7	2.46	0.13	3.25	新寛永
12-12	16-12	寛永通宝	SX02近世	H7	2.34	0.10	2.24	新寛永
12-13	16-13	寛永通宝		表採	2.30	0.10	1.68	新寛永
12-14	16-14	寛永通宝		表採	2.43	0.10	2.77	新寛永

表6 出土金属製品観察表

単位=cm・g

押 国	国 版	遺物名	遺構	グリット	長 さ	幅	厚 み	重 さ	備 考
12-18	16-18	鍔口		H7	12.00	6.15	0.35	157.66	火を受けている。破片あり
12-19	16-19	金具か		H7	5.65	2.80	0.10	11.94	穴加工,木質遺存
12-20	16-20	釘		H7	6.40		0.30	1.89	曲げ加工あり
12-21	16-21	釘		15.6	3.25		0.60	1.48	
12-22	16-22	釘		H7	2.90		0.35	2.89	断面四角形
12-23	16-23	蝶番	SX10	H7	3.50	0.95	0.20	3.61	木質遺存

表7 出土土製品観察表

単位=cm・g

押 国	国 版	遺 物 名	遺 構	グリッド	長 さ	幅	厚 み	重 さ
12-15	16-15	土人形 型		H7	6.00	6.50	2.40	110

表8 出土石製品観察表

単位=cm

掘 区	図 版	グリッド	遺 構	層 位	種 別	部 位	径(タテ×ヨコ)・高さ	石 材
13-1	16-1				法蓮印塔	相輪	径10×29	砂岩
13-2		H7	SX04	表土	法蓮印塔	相輪	径11×20	砂岩
13-3		H6	SX06		法蓮印塔	相輪	径9×19	砂岩
13-4					法蓮印塔	相輪	径10×25	砂岩
13-5					法蓮印塔	相輪	径10×11	砂岩
13-6				表土	法蓮印塔	相輪	径9×12	砂岩
13-7					法蓮印塔	相輪	径10×20	砂岩
13-8					法蓮印塔	相輪	径10×18	砂岩
13-9		H7	SX06	表土	法蓮印塔	相輪	径11×9	砂岩
13-10	17-10				法蓮印塔	笠	21×15	砂岩
13-11		H6	SX06		法蓮印塔	笠	11×11	砂岩
13-12	17-12				法蓮印塔	基礎	23×18	砂岩
13-13	17-13	H7	SX06		法蓮印塔	基礎	24×21	砂岩
14-14					五輪塔	空風輪	径14×16	砂岩
14-15	17-15	H7		表土	五輪塔	空風輪	径11×15	砂岩
14-16	17-16				五輪塔	空風輪	径10×15	砂岩
14-17		G8			五輪塔	水輪	径18×10	砂岩
14-18		H6	SX06	表土	五輪塔	水輪	径18×11	砂岩
14-19	17-19	H6	SX06	表土	五輪塔	水輪	(16×18×11)	砂岩
14-20		H6	SX06		五輪塔	水輪	(9)×11	砂岩
14-21		H6	SX06		五輪塔	火輪	(11)×(16)×9	砂岩
14-22	18-22	H6	SX06	表土	五輪塔	火輪	17×16×8	砂岩
14-23		H7	SX06	表土	五輪塔	火輪	17×(10)×11	砂岩
14-24		H6,7	SX06	表土	五輪塔	地輪	15×11	砂岩
14-25		H7	SX04	遺構検出	五輪塔	地輪	18×13	砂岩
14-26		H7	SX05	表土	五輪塔	地輪	18×(18)×13	砂岩
14-27	18-27	H6	SX06	表土	五輪塔	地輪	17×17×11	砂岩
14-28		H6	SX06	表土	石塔	基礎	17×16×10	砂岩
15-29	18-29				一石五輪塔		12×32	砂岩
15-30	18-30	H7	SX04	表土	一石五輪塔		径9×24	砂岩
15-31	18-31			表土	一石五輪塔		10×24	砂岩
15-32		H7		表土	一石五輪塔	空風輪	径8×12	砂岩
15-33					一石五輪塔		径10×20	砂岩
15-34	18-34	H6	SX06		石塔	近世 墓塔基礎	30×32×8	砂岩
11-45	16-45	G9			打製石斧		19.3×8.2×4.5	硬質砂岩

図 版

図版1



1 法明寺古墳周辺空中写真（南より）



2 法明寺古墳空中写真（南より）

図版2



1 調査前法明寺古墳（東より）



2 法明寺古墳 完堀状況（東より）

図版3



1 法明寺古墳 墓丘調査（南より）



2 法明寺古墳 墓丘東西断面（南より）

図版4



1 調査前法明寺古墳（東より）



2 調査区西側完掘状況（西より）



3 調査区東側完掘状況（東より）

図版5



1 法明寺古墳 墳丘東西断面（南より）



2 法明寺古墳 墳丘南北断面（西より）

図版6



1 SD01近景（東より）



2 SX04・05・06全景（東より）



3 山茶碗出土状況（北より）

図版7



1 石斧出土状況（西より）



2 山茶碗出土状況（東より）



3 水滴出土状況（南より）

図版8



1 SX04・05・06近景（北より）



2 SX06近景（北より）

図版9



1 SX03近景（東より）



2 石塔出土状況（東より）



3 SX09近景（西より）

図版10



1 SX01・02・10近景（南より）



2 SX01・02・10近景（南より）

図版11



1 SX02人骨・六道鏡出土状況
(南より)

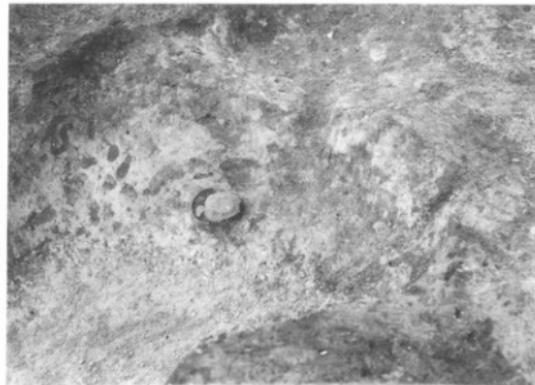


2 SX08近景（西より）



3 SX08人骨・カワラケ出土状況
(南より)

図版12



1 SX09カワラケ出土状況
(南より)

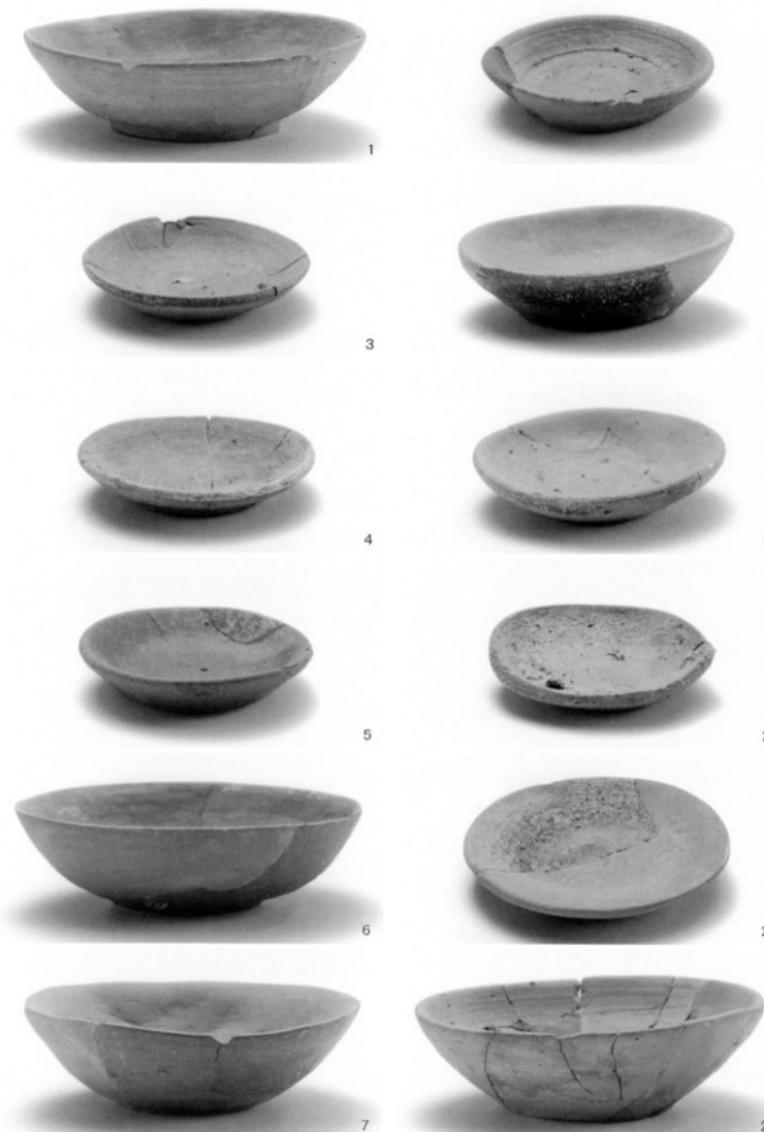


2 SX01・02・07完掘状況
(南より)



3 SX02完掘状況(南より)

図版13

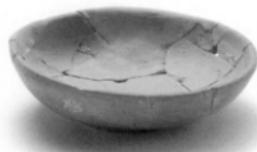


出土遺物1 土器

図版14



26



35



27



36



30



40



31



41



32



43

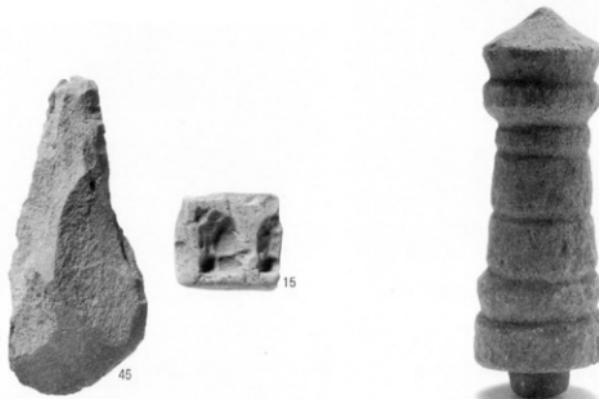
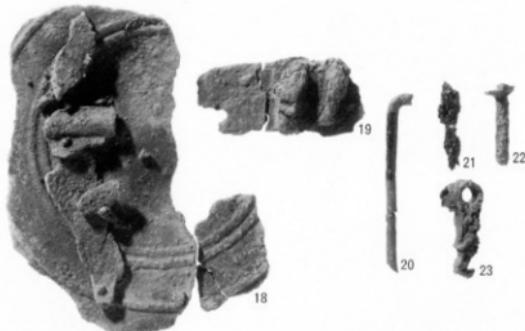
出土遺物2 土器・陶器

図版15



出土遺物3 土器・陶器

図版16



1

出土遺物4 金属・土製品・石製品



10



15



12



16



13



19

出土遺物5 石製品

図版18



22



30



27



31



29



34

出土遺物 6 石製品

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第199集

法明寺古墳

平成19・20年度（主）吉田大東線緊急交通改善整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月10日発行

編集発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2-16-19
TEL 055-921-1839

